白蘭と Sum pa の rLaṅs 氏

山口瑞鳳

目次

一、はじめに
二、白蘭の位置
三、Sum pa 部族とその所在地
四、むすび

一、はじめに

久しい以前のことであるが、女国をめぐつて登場する蘇毗[1]のチベット名に関し、蘇毗が孫波と称したとある中国史料[2]によつて Pelliot 氏はチベット文献に屢々言及されている Sum pa 族をとり上げたため[3]、羽田氏は So byi[4]の名を、Thomas 氏は Supiya[5]を夫々もち出し、Supiya=So byi=Sum pa が学界では決定的な意見となつた[6]。

先頃、筆者は、「孫波」をもつて Sum pa の対音とはするが、チベットの軍制、即ち、「翼」ru の編成において、

五翼制になつたとき現れた支部第三翼 Yan lag gsum paḥi ru をいう略称に相当するもので、Sum pa 族という種族の呼称に宛てられるべきではないとした。(7) 既に、G. Uray 氏も、Sum ru を以て Sum pa 族の「翼」と見做しているので、(8) Sum pa 族の住地が、Sum ru 或いは Sum paḥi ru の領界(9)とは離れたところにあつた旨を早急に示すべきであると考えた。

また、Sum pa 族に関してシナ史料が何と言及しているか、果して、蘇毗、或いは孫波と異つた呼称を用いているかということにもなるが、筆者は、標題で示したように、「白蘭」をもつてこれに宛てる。従つて、先づ、白蘭に関する従来の見解を見ることから出発し、白蘭の位置を自ら確かめた上で、Sum pa 族に話を移し、その構成氏族を紹介し、彼等、ḥBal, rLaṅs 氏の住地を探つて、白蘭の地にそれを見定めることにした。

従来、筆者は、白蘭が ḥBal, rLaṅs 二部族の複合体を示す称の対音ではないかと考えていたが、(10) 今は、むしろ白蘭の「蘭」のみが rLaṅs の対音で、「白」は或る意味をもつて冠せられたものと考えている。この点は白馬についても同様で、「馬」が ḥBal の対音を示すものと判断している。(11) 白蘭は別の名を参狼種、即ち、Sum rLaṅs といつたのに違いなく、氂牛種といわれる越嶲羌も同系の分枝で、現に、馬 ḥBal 郎 rLaṅs の二姓を有し、「白」とも特別の関係を保つている。(12) 彼等が「白」に関して寄せた信仰は独特のもので、恐らく、漢人にもよく知られていたため、白を冠して呼ばれたのであろう。

また、rLaṅs 氏が統合吸収した東女国から、西方の女国までを辿る試みや、大羊同の東遷も、本論ときり離しては論じにくい点もあつたが、紙幅の関係から、白蘭の呼称の考察と共に、二つの別稿で論じ、(13) 今回は rLaṅs 氏の

居住地が、白蘭のそれと重なるということに問題を限ることにした。白蘭の名称に関しての決論はもち越しになるが、Sum pa の位置が、蘇毗や Sum ru の所在と明瞭に区別しうることは確かめたいと思う。

二、白蘭の位置

白蘭の位置については、かつて松田氏が「吐谷渾遣使考」[14]の前半のうちにくわしく論じ、その結論は今なお学界一般の支持を得ている。[15] 同氏は白蘭を青海の西（南西としている）にあるツァイダム地方にいたものとし、Burkhan Budda 山を白蘭山に比定し、白蘭の名もこの山名に由来するものでないかとする。[16] また、吐蕃に入る道筋として「鄯城、烏海、吐谷渾、白蘭、多弥、蘇毗、吐蕃」の名を連ねて示す。[17]

筆者の結論はこれらに対立するもので、白蘭は洮水の西側を南に下つたところにあり、唐代はじめには、松潘の西南、恭州、維州辺を中心としていたとする。また、白蘭山を何処に比定するかは知らないが、[18] Burkhan Budda 山ではないと考え、入吐蕃道から白蘭の名を除くべきであるとする。[19] さらに、白蘭山が部族に名を与えたというより、彼等の棲息地にあつたため、山に部族の名が与えられたと考えるのである。

先づ、松田氏が白蘭の所在地とするツァイダム Tshvahi ḥdam（塩沢）[20]は、吐谷渾を松田氏の所説に従つて、かりに青海中心のものとしても、その真西に当り、西南にあるとする諸記録とは一致しない。まして、青海は後に見るように、ある時期以後にしか吐谷渾の領域とはならないので、[21][32] この結論には難点がある。

松田氏は、白蘭を青海の西南に置くことが自明のこととして、特に説明を加えないが、[22] その所説は北周書巻四

九、異域伝に

白蘭者、羌之別種也、其地東北接二吐谷渾一、西北至二利模徒一、南界二郵鄂一。

とあるのによったらしい。これによっても、「白蘭が青海の附近を中心とせる吐谷渾の西南に位したこと」[23]は決して保証されていない。吐谷渾の中心地は、この場合、（北）利模徒、郵鄂の所在を追求することによってしか決められないからである。

松田氏はまた、新唐書西域伝の党項の条から

又有二白蘭羌一、吐蕃謂二之丁零一、左屬二党項一、右與二多彌一接、勝兵万人、

とあるのを引用し、隋書西域伝にいう党項の位置

東接二臨洮、西平一、西拒二葉護一、南北数千里

をもつて「白蘭はその西方に擬せられるのが当然である。」とする。[24] しかし、右の文でこれをいうには、白蘭を葉護と同一とするか、そのように誤つて示したとする以外にない。第一、臨洮、西平は吐谷渾の元来の根拠地である。それを東に控えれば、吐谷渾自身が発展して収めた地域[25]と、党項の拠つた所とが重なるのではないだろうか。つまり、この党項の位置は、白蘭の正確な関係位置を引き出すためには適当でないから、利用を控えねばならないのである。

吐谷渾の南西に当る白蘭という場合、方角の源になる吐谷渾が、青海を中心とするのか、西に発展する以前の吐谷渾を指しているのかということになる。問題をこの点に戻して見直すべきであろう。

最も古く吐谷渾初期の事情を伝える宋書巻九六、鮮卑、吐谷渾伝には、

於レ是遂西附二陰山一、遭二晉乱一、遂得二上隴一、後魔……渾既上隴出二罕开西零一。西零今之西平郡。罕开今枹罕県。

自二枹罕一以東千余里、暨二甘松一。西至二河南一南界二昂城竜涸一、自二洮水一西南極二白蘭一。

とあつて、その拡がりは枹罕[26]の東側千里以上の地と、甘松[27]にまで達し、甘松の西側では黄河の南端部にも及び、南は昂城竜涸に至つていた。いいかえれば、洮水[28]の西南部に位置する白蘭でこの国は終つていたという。魏書巻一〇一の吐谷渾伝では、

吐谷渾遂徒二上隴一止二於枹罕一、暨二甘松南界昂城竜涸一。従二洮水一西南極二白蘭一、

とあり、枹罕を拠点にその勢力が甘松の南端にある昂城竜涸にまで及んでいたと読める。この場合、西零[29]の名が現れていないのに注意したい。おそらく、西平王の称をまだ得なかつた慕璝以前の領域[30]を示しているのであろう。しかし、魏書より古くに書かれた宋書に示されているから、西零の地は、遅くとも、宋書成立以前の五世紀内に吐谷渾の手に帰していたわけである。[30]

北史巻九六、吐谷渾伝には、

吐谷渾遂従二上隴一止二於枹罕一。従二枹罕一暨二甘松南界昂城竜涸一。従二排水一西南極二白蘭一

と魏書の記述をうけついでいるが、洮水を排水と誤つている。また、魏書と同様に、枹罕のあとに「以東千余里」もつけず、甘松と昂城竜涸とを直接結びつけている。[31]

晉書巻九七の四夷伝中には、

於レ是西附二陰山一、属二永嘉之乱一、始度レ隴而西、其後子孫拠有二西零已西甘松之界一、極二白蘭数千里一、

として「西零已西」という言葉を加えている。おそらく、西に発展した吐谷渾[32]を云うものであろう。ここでは「洮水の西南」が消え、以下と同様、昂城竜涸もおとしている。

隋書巻八三の吐谷渾伝では

吐谷渾与二若洛廆一不レ協、遂西度レ隴、止二于甘松之南一、洮水之西南極二白蘭山数千里之地一

として住地を「甘松の南」にまとめ[33]、白蘭を山名として示す。「洮水之西南」は書きとめられているが、晉書とともに、「数千里」または、「数千里之地」を誤つて加えている[34]。

通典巻一九〇、辺防六の吐谷渾伝には、諸記録を慎重に揉み合せて、

属二永嘉之乱一、始度レ隴西、至二於枹罕一、而後子孫拠有二甘松之南一、洮水之西南極二於白蘭一、在二益州西北一

と記録している。ここでは、晉書に見える「西零已西」を削つて、「甘松之南」のみを与えている。これでは、樹洛干以前の窮した吐谷渾しか指すことが出来ないので、正しくないであろう[35]。

晉書以外は、白蘭の位置を洮水の西南に示し、宋書が既にその名を与えているのにもかかわらず、「西零」を敢えて記していない。つまり、青海方面[36]を吐谷渾の本土と区別し、元来の本土と、その西南の白蘭のみを示すに留つているわけである。白蘭は、既に葉延の頃に吐谷渾の制するところとなるが、西零は、慕璝以後にはじめてその名が見られるのである[30]。まして、その西にあつた青海の、更にその西に位する Tshaḥi ḥdam に白蘭の所在を認めようとすることは、始めから考えられないことである。

隋書・晉書・通典では、他の史書に、昂城竜涸を南端にしていたとあるのを省いて、白蘭で尽きているとのみ示

している。昂城竜涸は白蘭に接していたか[37]、白蘭の中に及んでいたかで、白蘭のみを挙げることで、表現が足りたのではなかろうか。例えば、魏書に吐延の臨終を物語り、

吐延……性刻暴、為二昂城羌酋姜聡所レ刺、剣猶在レ体、呼二子葉延一、語二其大将紇拔涅一曰、吾気絶棺歛訖、便速去保二白蘭一、地既険遠、又土俗懦弱、易二控御一……

とあるが、昂城と白蘭の地のつながりを暗示していると思われる。「地既険遠」は中国から見てのことをいうのであろう。

竜涸については既に松田氏[38]、後藤氏[39]がくわしく触れているように、「北周の扶州。すなわち今の四川省松潘県の地に当つている[38]。」竜涸故城は俗に防渾城と呼ばれ、翼州衛山県の北にあり[39]、吐谷渾の南端を示していた。翼州は松州の南一八〇里、茂州の北一二〇里の地である[40]。

この竜涸と白蘭との関係はどうであろうか。松田氏も述べるように[41]、葉延以後、白蘭を制した吐谷渾王には屢々「白蘭王」の称号が加えられようとしている。晋書の吐谷渾伝には、視連が乞伏乾帰から白蘭王に封ぜられとある他に、後に視羆にも与えようとした

竜涸已西諸軍事沙州牧白蘭王

の冊号が見えている。沙州については松田氏の所論[42]にゆづるが、これからも竜涸の西に白蘭があつたのではないか[42]と疑うことが出来る。

先に引用した新唐書党項の条で述べられる白蘭の記事には、続いて

……俗与二党項一同、武徳六年使者入朝、明年以二其地一為二維恭二州一

と白蘭の拠っていたところを維恭二州とした旨が明記されている。元和郡県図志には、

……今名二姜維城一、即維所レ築、自レ晉以後、羌夷或降叛。……武徳七年白狗羌首領内附、於二姜維城一置二維州一、以統レ之、……（劍南道中維州）

としている。武徳七年のことは、新唐書の「武徳六年使者入朝……」に相当すると思われる。ただ、ここでは白蘭ではなく、白狗羌として示されている。通鑑の唐紀六、武徳六年十二月の条には[43]

白簡白狗羌竝遣使入貢……
以二白狗等羌地一置二維恭二州一

とある。ここで白簡とあるのは白蘭の誤りであろう。維州に関する記事には、旧唐書巻四一でも「白苟羌降附……」とあり、四川通志巻六、輿地、沿革、雑谷庁の条には、

唐武徳七年、白苟羌鄧賢佐内附、乃于二姜維故城一置二維州一……

とあるから、維州は白苟（白狗）のあと、恭州は白蘭の拠ったあとと見るべきであろう。いづれにせよ、白蘭と白狗とは、ほぼ同地域にあったと考えられる。ここで、維恭二州の位置が確かめられさえすれば、白蘭が竜涸の西側にあって、Tshaḥi ḥdam になかったことも確認されるわけである。まづ、維州は郡県図志では、

東至二茂州二百二十里

とあり、通典巻一七六、州郡六によっても、維州は

東北到二通化郡（＝茂州）二百二十里

とある。[44] 茂州は翼州の南百二十里にあると郡県図志でも通典でも示されている。翼州の衛山県に竜涸故城があつたことは既に見たとおりである。

恭州の位置については、二本とも

東南到二通化郡（＝茂州）三百五十里

とあり、その維州に対する位置は郡県図志に

西南至二維州一三百五十里

とあり、通典では、

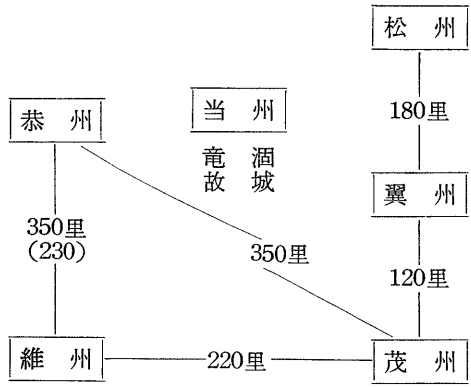
南至二維川郡（維州）二百三十里

と示されている。いづれにせよ、維州の北方で、やや東寄りにあつたとすることが出来るであろう。とすれば、rLaṅs 氏の拠つた Tsha kho 雑谷[45]の地が、ほぼ、ここに重なるわけである。

維恭二州、とくに恭州が竜涸已西にあることは、これではつきりしたことになる。つまり、白蘭が竜涸の西側にあり、洮水の西南に位し、決して青海を中心にした吐谷渾の西南に当らないことを先づ確認したわけである。

次に、白蘭そのものの周辺をもう一度改めて見直したい。

白蘭は左に党項、右に多弥を控えていると新唐書は述べていた。先づ、党項であるが、どのような場所を占めて



いたであろうか。旧唐書巻一九八の党項伝では、貞観三年のこととして細封歩頼の内附をしるし、次のように云う。

列二其地一為二軌州一、拝二歩頼一為二刺史一

続いて内属したものについても

列二其地一為二崌、奉、巖、遠四州一、各拝二其首領一為二刺史一

と示す。新唐書巻一四六上、党項伝にも同様の趣旨が述べられ、思頭と共に内附した拓拔赤辞については旧唐書よりくわしく

以二其地一為二懿、嵯、麟、可三十二州一、以二松州一為二都督府一、擢二赤辞西戎州都督一、賜二氏李一

という記事を載せている。

貞観三年細封歩頼に内附を説いた鄭元疇は南会州、即ち茂州の都督であった。(46) 軌州等のことは旧唐書巻四一、志第二十一、地理四、劒南道、松州下都督府の条にも挙げられ、

隋同昌郡嘉誠県、武徳元年置二松州一、貞観二年置二都督府一、督二崌、懿、嵯、闊、麟、雅、叢、可、遠、奉、巖、諾、峩、彭、軌、蓋、直、肆、位、玉、璋、祐、台、橋、序二十五羈縻等州一、永徽之後、生羌相継忽叛、屢有二廃置一、

と羈縻州二十五のうちにすべてが数えられている。夫々の州については、ひきつづいて同書に貞観元年から十年の

間に党項の拠つたところを州としたものである旨がしるされ、管県の名も与えられているが、これらをすべて現在の地名に比定することは殆んど不可能である。ただ松州の管下に入つたことと、茂州都督と交渉があつたことから、党項の位置を松州、茂州を結ぶ線の上に先ず見るべきであろう。いくつか位置のわかるものを挙げると、四川通志巻五七、輿地、古蹟の松潘直隷庁の条に松潘庁から見た軌州の位置に関し、

廃軌州在二庁西北一

とあり、続いて濶州については

廃濶州〔一統志〕在二庁西北一相近又有二諾州一

と示す。諾州は先述の二十五州中に含まれるものであり、規準になる松潘は、松州に与えられた明代以降の称である。[47] 以上の三州は、庁の西北に位したものであるから、一部の党項の位置は松州、茂州を結ぶ線の西側にやや外れることになる。崿州、遠州、可州については「四川通志」巻五、輿地沿革の、茂州直隷沿革表、唐代の段に松州都督府属の羈縻州として挙げられているのが見られるから、これら三州は、茂州と松州の間にあつたと見てよいであろう。

維恭二州が白狗、或いは白蘭のあとに置かれたのは武徳六・七年のことであり、軌州等が党項の地に置かれたのは、貞観年間でも、十年までのことであるから、相互に比較しても、時期のずれを問題にすることはない。白蘭の拠つていた恭州は、静州の西側にあり、静州は当州の西南六十里にあり、当州はまた松州の西南三百里のところにあつた。[48] 関係位置を東北の松州から都合しても、既に見たように、南から判断しても、[48] 恭州の位地は、ともに、今日の Tsha kho 雑谷周辺におちつき、大体松川の西南にあつたことになる。勿論、恭州は白蘭の一部が拠つていたところなのであ

ろう。いずれにせよ、白蘭と党項とは松州の西側で界を接していたに違いない。このことは旧唐書巻一九六上、吐蕃伝に見える

於レ是進レ兵、攻破二党項及白蘭諸羌一、率二其衆二十余万一、頓二於松州西境一、遣レ使貢二金帛一、云、来二迎公主一。

という記事によつても確かめられる。時は貞観十二年のことであつた。文成公主を迎えるに当つて松州を威嚇した吐蕃は、その西境に屯する前に、白蘭と党項とを制しなければならなかつたのである。

「左に党項、右に多弥」を控えていたというから、白蘭は党項より西側にいたわけである。白蘭の根拠地の一つである恭州をとつて見ても、党項はその東側の松州管下に見られるので、矛盾するところはない。多弥の方は當迷とも写され、犁牛河 ḥBri chu の東岸にあり、その勢力は sToṅ skor 地方から rMa chen spom ra の東北麓 sToṅ sde（東提・同徳）地方に及んでいた。古くから、黄河上流の最初の急折北上部、つまり、mDzod dge（作爾革）地域の西側にいたと見られるから、多弥は恭州を含む白蘭の西から西北にかけていたことになる。[49]

北周書巻四九、異域伝にあつた白蘭に関する記述には、「其地……西北至利模徒」とあるが、北史巻九六、白蘭伝には「西北利模徒」とある。隋書巻八三、北史巻九六の附国伝の終りには、附国と党項との間にある諸部族として「北利、模徒」が挙げられている。従つて、北周書の記事は「其地……西至北利模徒」と訂正されるべきである。この北利は Pe ri（白利）であろうから、今日と変らぬ多弥の西南にあり、白蘭からは西にあつたとすることが出来よう。[50]

模徒は Bod[51] で、Khyaṅ po Puṅ sad zu tse が征服した rTsaṅ Bod の Bod に当り、rTsaṅ smad rtsaṅ[52] の東南にあると考えられる。rTsaṅ smad rtsaṅ の地は sKye dgu mdo（玉樹）から Khyuṅ po にかけての ḥBri chu

の西側をいう。従つて、その東南の ḥBri chu と rDza chu とに挾まれた一帯は北利の真西に位する。[53] 白蘭の西には北利、模徒が続いていたことを確かめたわけである。

周書では南に「郵鄂」、北史では「郵鄂」、隋書では「那鄂」があるとしている。いづれも nâ-ngâk であつて ñag の対音を示しているとしか考えられない。この ñag から Mi ñag 弭薬、[54] 羅女蛮 (Lo ñag)、[55] Ñag roṅ, Ñag chu[56] などの名が浮び上つてくる。弭薬が吐蕃に降つた党項の称である旨は旧唐書に示され、[57] 他方、チベット文献では Byaṅ gi mi ñag「北の弭薬」の名もあり、西夏を建国した一党を指している。[58] 党項の一部を構成したものにおそらく mi ñag の名が与えられていたのであろう。[59] 今、白蘭の代りに rLaṅs 氏をもつてくると、彼等が吸収した金川の東女国が、南に羅女 (Lo ñag) 蛮を控えていたという記述にあうことができる。[60] 今日美諾[123] と呼ばれる地が東女国の南端に当り、羅女蛮はその南側にいた筈で、Ñag roṅ, Ñag chu は、現在その西に位している。[56]

三、Sum pa 部族とその所在地

Sum pa と称する部族について、その構成や所在が明らかにされたことはこれまで殆んどなかつたので、[61] 以下にそれらのことを考えて見たい。

チベット語で Sum pa と云えば、一般に「Sum の人」という意味になる。そこで Sum という国を探して見ると、敦煌文書の一つに[62] 吐蕃の勢力圏下にある十三の小国 rgyal phran についていう表があつて、

Sum yul gyi ya sum naḥ/ rje ḥBal lji maṅ ru ti/ blon po rLaṅ daṅ Kam/

Sum 国の Ya sum には王 ḥBal lji maṅ ru ti と大臣 rLaṅ と Kam（の二氏がいた）。

と示しているのが見られる。この表で blon po 大臣とあるのは、勢力下にはあるが、有力な他部族の謂であるかも知れない。ḥBal 氏は Sum yul の Ya sum にあり、他の二氏も、Sum yul のどこかに拠っていたというのであろう。これら三氏は、いづれも、一応 Sum pa と呼ばれてよいわけである。

ḥBal 氏も、Kam 氏も、直接 Sum pa と呼ばれている例は知られていないが、rLaṅs 氏に関しては、Bon po 関係の文献に[63]、

Sum pa gLaṅ gi Gyim çod

とか、

Sum pa gLaṅ gi skad

と称して、直接 rLaṅs の上に Sum pa を冠しているのが見られる。右の Gyim çod は、後程見るように、rLaṅs 氏の重要な居住地の一つで、gLaṅ は rLaṅs の異態字[64]に過ぎないこともわかる。

以上のことから、Sum pa とは Sum yul の住民を指して云う称であることが、読者に充分承認されたと思う。Sum pa 一般については敦煌文書[65]に多少伝えるところがあるので、簡単に紹介しておきたい。彼等[66]は Khri slon rtsan 時代に一応吐蕃に帰順していたが、この吐蕃王が殺されると離反の色を見せ[67]た。新たに立った Khri sroṅ brtsan の地位が安定したとき、Myaṅ Shaṅ snaṅ によって吐蕃の直轄下にひき入れられた。敦煌文書の「宰相記[68]」には、

btsan po yab khri slon btsan dguṅ du gçegs// sras Khri sroṅ brtsan gyi riṅ la// Myaṅ maṅ po rje Shaṅ

snaṅ gis// Sum khams thams çad ḥbaṅs su dgug par bkaḥ stsal to// Myaṅ maṅ po rje Shaṅ snaṅ gis// ḥdzaṅs kyi blo sgyu gñis kyis// myi rta gñis tshegs ma byuṅ bar// dpyaḥ phab lug rtug gi spu// lce thor to la brjod de// ḥbaṅs gñug ma bshin du bkug ste ḥuṅ tsam mo//

父王 Khri slon btsan が歿した。子 Khri sroṅ brtsan (=Sroṅ brtsan sgam po) の代に、Myaṅ maṅ po rje Shaṅ snaṅ が Sum の国全てを臣属させるように敕命を受けた。Myaṅ maṅ po rje Shaṅ snaṅ は機智と奇策の二つを用い、人も馬も共に労せずして朝貢品は、牡羊の毛たるべきことを舌先三寸で説きくるめ、彼等をして竹のしおれるように臣礼をとらしめた程であった。

とあり。同様の記事は敦煌文書「王統記」の Sroṅ brtsan sgam po の項にも見えている。[69] Myaṅ Shaṅ snaṅ は Khri sLon rtsan 代からの宰相で、彼が Pun sad zu rtse を押えてその地位を得た話は、くわしく敦煌文書[70]に示されている。Khri slon rtsan が殺された後も、その子 Khri sroṅ brtsan の宰相として留り、新王の最初の大事業として、この Sum pa 征服[71]を成し遂げたのである。

Sum pa を構成した rLaṅ, ḥBal の名が揃って「編年記」に見えるのは、[72] かかなりおくれて Khri ḥdus sron の七四六年になる。七四六年の条には、

blon ce Cuṅ bzaṅ (ḥor maṅ) daṅ ḥBal (sKye bzaṅ) ldoṅ tshab daṅ Laṅ (/rLaṅs) Myes zigs gsum gyis 宰相 Cuṅ bzaṅ (ḥor maṅ) と ḥBal (sKyes bzaṅ) ldoṅ tshab' Laṅ (/rLaṅs) Myes zigs の三人が、

とあって、当時、二氏は権力機構の最上層にいたことが示されている。「宰相記」[73]には、ḥBro Cuṅ bzaṅ ḥor maṅ

のあと、ḥBal sKyes bzaṅ ldoṅ tshab が blon che 宰相をつとめたと記録されている。「編年記」は七四八～七五四年の間の記録を欠くため、就任年次は不明であるが、この間に宰相になつたことは確かである。Khri ḥdus sroṅ の歿した翌年の七五五年の条に[74]、

Laṅ, ḥBal gyi bran spyugste/
Laṅ, ḥBal の家来が追放されて

とあり、ついで、

Laṅ, ḥBal bkyon bab paḥi nor brtsis
Laṅ, ḥBal が誅せられて、その財を押収した。

と示し、両氏が Khri ḥdus sroṅ 歿後の権力移動で失脚[75]したことを明らかにしている。しかし、これを境に中央の権力から両氏の系統が締め出されてしまつたわけではなく、その後に返り咲いたことは、Khri lde sroṅ btsan の勅書に仏教信奉の誓約者として、rLaṅ 氏が二人、ḥBal 氏が一名見えることや[76]、唐蕃会盟碑の吐蕃側代表に ḥBal 氏が名を連ねていることでもわかる[77]。

右のように、Sum pa が吐蕃王朝に臣服して、中央の権力機構にまで進出したことは疑いもないことであるが、彼等について、まとまつて知られることは極めて少ない。rLaṅs 氏は別として、他の二氏について後代では僅かな記録が見出されるに過ぎない。

先づ、Kam 氏に関しては、敦煌編年記六五三年の条に、

mDo smad du Kam Khri bzaṅ bye ḥdaḥ Thoṅ myis bkum ste ça gñard/

mDo smad では Kam Khri bzaṅ bye ḥdaḥ が Thoṅ myi に殺され、仇が討たれた。

とあるのに尽きる。Thoṅ myi は多弥[78]であり、Kam 氏が多弥と境を接していたらしいことがわかる。

mDo smad というのは、mDo stod に対していう場合、A mdo 全体を意味する。mDo stod は西康省を指し[79]一般に mDo stod のかわりに mDo khams という呼称が多く用いられ[80]、sMad khams とも云う。普通は、A mdo を二つに分けて、（狭義の）mDo smad と Tsoṅ kha とする。mDo smad に対しては g-Yar mo thaṅ、Tsoṅ kha に対しては Gyi thaṅ の称も用いられる[81]。引用文の mDo smad は、A mdo の南、mDo khams の東にある狭義の地域で、殆んど四川省の西北部にあたり、一部は南甘粛の西部にもかかる[82]。

rLaṅs Po ti bse ru には、rLaṅs 氏が支配し、自由に動かせた勢力として lDoṅ（鄧）[83]と Seḥn（細封＝蘇）[84]の他に、

Khams pa ru gsum mthu daṅ bcas pa yaṅ rLaṅs la yod/

Khams pa の三翼、強力なるものまた rLaṅs にあり、

と khams pa なる名称を示す[85]。また、有名な

rLaṅs khams pa go cha, rLaṅs khams pa Vai ro tsa na

の名を挙げ[85]、いづれも、rLaṅs 氏に服属したものとして扱つている。Khams pa とはおそらく Kam 氏の一党をいうものであろうが、これ以上のことはわからない。

Kam 氏を討つた多弥は Thoṅ と Myi[86] とから成る複合部族[87]と考えられ、その位置は既に触れたとおりである。Thoṅ（董）は sToṅ とも綴られ、四川の女国と周辺の王の姓としても中国史料に見える。[88] 今日の地図に同徳として示されるのは、sToṅ paḥi sde の略称 sToṅ sde の対音で、その集団の拠つた地の名残りである。この近くに、ḥBal の氏の所在の跡をつきとめることが出来る。Deb ther rgya mtsho「本論」[89]に、

rTse ḥbal gyi gshuṅ ḥdi ñid yin la/ çar gyi Lug mgoḥi la btsas/ lhoḥi mDzod dge ñin maḥi sa Chu gor gor/ nub kyi rDo la lha chen/ byaṅ gi gÑan ri rdza dmar gyi bar Waṅ gi sar gtogs çiṅ/……

rTse ḥbal の中央というのはここであるが、東の Lug mgo の峠、南の mDzod dge ñi ma の地、Chu gor gor、西の rDo la lha chen、北の gÑan ri rDza dmar の間が Waṅ の地に属し、……

とあるのが見られる。Waṅ は Waṅ gi U rge grva tshaṅ[90] という寺で、これはその寺領を示した文である。rTse ḥbal というのは、rTse chu の流域に拠つた ḥBal 氏の跡を指し、近代では A rig[91] の住地になつている。洮河の源、西傾山の北麓にある草地である。今日の地図では明瞭ではないので、この辺の地勢をチベットの資料[92]によつて先づ紹介しよう。

(rMa chuḥi mgo) de nas lho ṅos su ḥbab pa gÑan po g-yu rtseḥi g-yon nas thon/ rim gyis byaṅ du ḥkhyogs pa dKar dbur rKa chu daṅ/ Tsha gaṅ pe çiṅ gi mdun nas dMe chu ḥdres te nub ṅos draṅ por bgrod paḥi khug so gcig/ gÇi mdo daṅ rTse mdor gÇi chu daṅ rTse chu ḥdres çiṅ/ Rva rgya nas slar yaṅ byaṅ du ḥbab pa ḥBal mdo nas çar ṅos droṅ por ḥbab paḥi khug so gcig/

(rMa chu 黄河は源) から南に流れ落ち、gÑan po g-Yu rtse の左手から現れ、順次北に向きをかえながら dKar dbu で rKa chu をまじえ、Tsha gaṅ pe çiṅ の前では、dMe chu を合流して西方に真直ぐ行こうとする曲がり角が一つ。gÇi mdo と rTse mdo では、gÇi chu と rTse chu が夫々流れこみ、Rva rgya から再び北流し、ḥBal mdo から東の方に真直ぐ流れる曲がり角がある。

右の文中の「左手」は南面して云い、「前」は西面して云っている。rKka chu は南から流れ込む嚕渓河[93]、dMe chu は東から注入する墨渓河[94]、gÇi chu は西から[95]、また rTse chu は東から黄河[96]に注いでいる。ḥBal mdo では ḥBal chu (馬河)[97] が東方から流入し、この河と rTse chu にしきられた中間の黄河右岸に、Ra rgya 拉加や sToṅ sde 同徳[98]がある。

問題を戻して考えて見よう。rTse ḥbal の西に rDo la lha chen があると示されているが、この峠は rTse chu と黄河に挟まれた地帯をその東に控えている[99]。この地は単に ḥBal gshuṅ「ḥBal の中央」とも呼ばれ[100]、Gad dmar, Ça bo の地を含んでいる[101]。いづれも rTse chu の北側にある。rTse chu の源と ḥBal chu の源は接し[97]、ḥBal chu 沿いには、lHa bkra (Lhab ja) に近く ḥBal gyi khe reb[102] がある。この地にも ḥBal の勢力が及んでいたに違いないが、rLaṅs 氏と併せて称せられる ḥBal 氏の所在は、むしろ、文字通りの ḥBal gshuṅ[100] に求められるべきであろう。

rTse ḥbal gshuṅ の南は mDzod dge ñin ma であると示されているが、この地は mDzod dge byams me[149] の北側 mDzod dge gliṅ といわれる地に接するか重なるかであろう[103]。Deb ther rgya mtsho「本論」[104]に、

Thu med Ho lo che（火落赤）[105]の黄河南部 mDzod dge gliṅ 征伐の際に、同行していたある Thaḥi ji が（中略）宴を張り、よい土地も、手勢もない旨（火落赤に）申し上げると、手勢を以て拠点を構え、rTse ḥbal の地を占領して（与えた）。

とあり、また、mDzod dge 王が三人の妃を娶り、三人の妃がもうけた三子の系統が夫々発展したところを述べた文に[106]、ḥBal za の名があり、王が ḥBal の地に歿したことを述べた後、

ḥBal za の子孫に dpon bLo gros bzaṅ というものがあり、（中略）ḥBos dpon po, gLiṅ ba の dpon po, bShag sṅom dpon po, mDzod dge smad の Çog ga lha の dpon po なども dpon bLo gros bzaṅ の系統である。（中略）gLiṅ pa の dpon po Rab brtan……, Rab brtan の子 A ḥbrug が rMa（chu）と rMe（chu）が合流するあたりに領土をもつた。

と示すものがある。この gLiṅ pa は、先の mDzod dge gliṅ の住民を云うのであり、gLiṅ pa が rMe chu, rMa chu, rKa chu に挟まれた mDzod dge Byams me の近くにあることもおよそうかがわれる[106]。

mDzod dge Byams me とその東の方は、清朝史料[107]で下作爾革と示される。つまり、mDzod dge smad（ma）である。この地の土司は清朝時代に「郎」rLaṅs 氏を名乗っているのが見られる[107]。ḥBal 氏について知られることは、右のように限られるが、rLaṅs 氏と境を接し、その北側にあつたことは、このあと rLaṅs 氏の住居地を探ることによつてもつとはつきりするであろう。この辺にいる[108] dBal は ḥBal とは別の部族であるため、ここでは触れなかつた。

次に、rLaṅ/gLaṅ/Laṅ 氏であるが、この方は、Phog mo gru pa 王朝の祖として、可なりのことが伝えられている。その主なる拠りどころである rLaṅ Po ti bse ru[109] によつて彼等の居住地を先づ探つて見よう。

rLaṅs yul Gyim çod rim çod daṅ/ ḥBri klu mdo smad kyi phyug drug/ rLaṅs pha spun tshogs paḥi ru mtsho daṅ/ gSer ḥdzin gSum rMe yul bcas daṅ/ (53 a)

rLaṅs の国は Gyim çod rim çod と ḥBri klu mDo smad の六長者、rLaṅs 氏一族の群がる ru mtsho[110] と、rMe yul を含む gSer ḥdzin gSum と、

という一節によつて rLaṅs 氏[111]の拠点が Gyim çod rim çod, ḥBri klu mdo smad, rMe yul を含む gSer hdzin gSum の国などから成つていたことが知られる。

これらのうちの Gyim çod については、

Sum pa gLaṅ gi Gyim çod

Sum pa の gLaṅ 氏の Gyim çod

などと他にも[112]云うものがあり、La dags rgyal rabs[113] に

Gyim çaṅ Hor

とあるのも、これと同じことを云うように思われる。Hor の称は、実は、rLaṅs 氏が母系から得た名称[114]であるが、Sum pa にも冠して用いられている[115]。つまり、Hor とあれば、ここでは Sum pa, rLaṅs というのも同然なわけである。Sum pa と Hor との結びつきは、また、Sum pa の称によつて rLaṅs 氏が代名されている例[116]の一つとも数えられよう。

rLaṅs Po ti bse ru には、mDo smad g-Yar mo thaṅ[81] に発展した rLaṅs 氏の一枝、Ru dpon 系について次のように所轄をのべたところがある[117]。

白蘭と Sum pa の rLaṅs 氏　山口

Ru dpon gyis Sum cu pa rLaṅs yul Gyis çod brag çele rGya gar gi shol rTa çod luṅ dmar bzuṅ/ (15b)

右の文は一見しただけで訳すと、恰かも印度でも支配したかのようになるが、そうではない。テキストの誤写が甚だしいので、くわしく調べて見よう。Sum cu pa rLaṅs yul Gyis çod は勿論、Sum pa rLaṅs yul Gyim çod とあるべきである。brag çele は brag çel yi の訛りと考えられる。他の文例と比較して見ないと、確かな訳はつけられないので、先づそれを試みよう。同書に rLaṅs 氏の Sugata gocha が土地の神に案内されて rTa çod luṅ dmar まで送られて来たとし、

rLaṅs yul gyi Gyim çod brag çol (çele) rGya gar gyi shol rTa çod luṅ dmar du skyal ba la (48 a)

と示す。また、別に、

Ru dpon gyi brag çele rGya gar gyi lha shol bdag (16 a)

Ru dpon が brag çele rGya gar gyi lha の麓（の所属地）を私有した。

と、第一の文に対応するものが見出されるので、三つを綜合して見ると、rLaṅs yul の Gyim çod にある rTa çod luṅ dmar を別の云い方で

brag çele rGya gar gyi (lha) shol

としているのが認められる。rGya gar gyi lha だけが明らかに置きかえられた形で

rTa çod çel le phu gsum gyi lha khaṅ (22b)

rTa çod phu gsum gyi lha khaṅ (28 b)

rTa çod lha khaṅ (46 a)

などとするものがあり、phu gsum の phu gcig に行者のいたことにも言及されている。[118] 従つて、この phu は「奥」を示すものでなく、phug「窟」をいうことになる。別のところでは、

rTa çod rGyaṅ gi brag phug (29 b)

と称する名を挙げ、いいかえて、実に、

rGya gar rdo rje gdan shol

と見做している。[119] rTa çod rGyaṅ[120] を rTa rGyaṅ と略した形でも示し、

rTa rgyaṅ la khaḥi (/lha khaṅ gi) brag (46 b)

rTa rgyaṅ ral (rag/brag) gsum (46 a)

とし、ここに建てた三つの gtsug lag khaṅ を

Rim çod yon tan ḥbyuṅ gnas (46 b)

Rim çod の「功徳の生ずるところ」

としている。以上のことがすべての同一のところを指すと考えられ、まとめると、rTa çod または、その rGyaṅ/rTa rgyaṅ には çel (水晶) の brag (岩) からなる phug (窟) が三つあり、夫々に gtsug lag khaṅ が一つあつた。

• これを総じて

• rTa çod (rgyaṅ) brag çel yi phug gsum gyi lha khaṅ

と呼び、この地を rGya gar rdo rje gdan、即ち、印度にある仏陀正覚の金剛座（と瓜二つのもの）と考えた。そして Brag çel yi rGya gar rdo rje gdan とか、Brag çel yi rGya gar rdo rje gdan gyi lha khaṅ と異称したのである。これが先に見たような不完全な形で brag çel le rGya gar とか、brag çele rGya gar gyi lha として伝えられた。したがつて最初に挙げた文の訳は、

Ru dpon は Sum pa の rLaṅs 氏の国、Gyim çod にある「水晶岩印度（金剛座）」の麓の所属地 rTa çod luṅ dmar を掌握した。

とつけられる。また、rTa çod luṅ dmar は rTa çod rgyaṅ とも Rim çod とも呼ばれたことになり、Gyim çod rim çod というのは、rTa çod luṅ dmar の異称に他ならないことになる。

今、金川瑣記[121]を見ると、

章谷之墨爾多山、高挿霄漢、相二伝釈迦仏成道処一、上多喇嘛寺、常出二異僧一……

とあり、更に、

章谷屯多二雲母山一、日色照耀、徧レ地作二金銀光彩一、石如二水晶一、

と示され、先述の事項に極めてよく合致する事情が知られる。[121]この章谷については同書に、

小金川、原名二儹拉一、美諾為二其巣穴一……折二儹拉一為二懋功、撫辺、章谷三屯一

とあり、元来、儹拉、bTsan la (/lha) に属していた三地域の一としている。[122]儹拉の地は清代に小金川と改称され

たもので、元来、大金川と共に金川と総称されていた。[123] このことから、金川が Gyim çod の地であることが容易に看取される。[124] チベット文献に見える Gyim çoṅ は必らずしも誤写とするには当らず、金川の対音と見ることも出来る。

章谷は打箭鑪 Dar rtse mdo から金川に至る途上にあり、章谷、[125] 巴旺 Ba bam、巴底 Bra sti（巴拉克底）、馬爾邦[126]と並び、綏靖 Chu chen、崇化と同様、大金川河沿いにあり、この地で小金川河が合流する。[126]

儹拉 bTsan la は rGyal mo roṅ の So maṅ 女王国の祖がかつて留っていたところであり、東女国の故地である。東女国は後に見る潘州の rLaṅs 氏の支配を受けていた。[127] 清代の儹拉が巣穴とするとあった美諾の地名や、東女国が南に控えていた羅女蛮について Mi ñag、乃至 Lo ñag として異同を論じたいが、紙幅がないので割愛する。[128] ただ、白蘭の南に邨鄂 ñag があったとする周書の記述を憶い出して置きたい。[129]

以上で rLaṅs 氏の重要な拠点としての Gyim cod が、小金川を含む金川の地であることを確かめ得たと思う。rLaṅs Po ti bse ru には、[130] [131]

rTa çod, Gyim çod, ḥJaḥ ço の三

と rTa çod を Gyim çod と明らかに区別している例も見られるが、後代、小金川を大金川から区別したのに相応するとしてよいであろう。

第二に云われる ḥBri klu mdo smad については、

1　mDo smad ḥBri klu Bel chu naṅ/ ḥPhan gtogs rLaṅs rgyud maṅ po daṅ/ (52 a)

2　Byaṅ chub ḥdre bkol yan/ rLaṅs kyi gdun brgyud/ ḥBri rLuṅ mDo smad pa ḥdug/ (54 a)

3　ḥBri klu mDo smad çar phyogs (53 b)

といつた用例が見られる。これから ḥBri klu または ḥBri kluṅ の位置を見出すことは殆んど望めない。ただ、Phog mo gru pa ḥGro mgoṅ rin po che の生誕地として知られる ḥBri luṅ rne çod[132] は Khams stod の lCag ra, dPal ḥbar[133] に近いとされるが、これが本当ならば、当面の ḥBri rlu/ klu/ kluṅ とは同一地点を指すものではない。このことは我々の扱つている ḥBri rlu/ klu/ kluṅ が mDo smad、つまり g-Yar mo thaṅ[81] にあつて、Chab mdo の西方の地を指す Khams stod[134] の地とは明確に区別されるからである。この点は、また、「Byaṅ chub ḥdre bkol まで rLaṅs 氏の家系は ḥBri rluṅ mdo smad の住人であつた。」とあり、続いて「Byaṅ chub ḥdre bkol は mDo stod gnas drug に至り、sTod rLaṅs である lHa gzigs の三部の家系がここに生じた。[135]」と示される文章で了解される。rLaṅs Po ti bse ru[136] の別の箇所では、Byaṅ chub ḥdre bkol が、いづれも Khams stod にある Nags çod, Sog çod に（新たに）居住した旨も記録されている。ḥBri kluṅ が Khams stod に見出されても、mDo smad の ḥBri rlu/ klu/ kluṅ と単純に同一視できないゆえんである。[135]

ことさら ḥBri rlu/ klu/ kluṅ の位置を求めて見れば、第一の引用に Bel chu naṅ とあるのが手がかりになろう。この Bel chu を ḥBal chu と解するより、[137] 巴河（dPal chu ?）とも示される rTse chu[96] に解すれば、rLaṅs 氏の領域内に ḥBri klu の地が求められる。dPal chu naṅ は恐らくこの流域（の南側）の kLu chu 上源の地とされるべきかも知れないが、今はこれ以上を遂求できない。

第三に、「rMe yul を含む gSer ḥdzin gSum」と示されるものについて見よう。rMe yul が何処にあるかは rLaṅs Po ti bse ru には示されていない。ただ、Deb ther rgya mtsho の「寺院総攬」[138]には、dMu dge（毛児蓋、毛児革）に近い dMeḥi sa を論じたところがあり、そこでは rÑa stod に続き、rÑa ñin dMeḥi sa として言及されているから、既に見た mDzod dge ñin ma（ñin srig）とも関連して考えられるべきであろう。[139]同書の叙述の順序からすれば、[140]dMehi sa は dMu dge より西にあり、その後に示される A ḥkhyam（暗匡）より東北にある筈で、その位置から、当然 rMe chu との関係が先づ疑われることになる。この地域には rMe/dMe を含む地名が多く、麦桑（墨倉 rMe tshaṅ）、[141]即ち rÑa（pa）bar（ma）（中阿塤）、[141]墨窪（rMe ba ?＝麦雑）[142] rMe tsha）、墨爾媽[143]などが見出される。

これらの地名に示される dMe は、いずれも、rMe の異態字であるに過ぎない。[144]今、rMe chu に関わりのある記録を求めると、Deb ther rgya mtsho の「本論」[145]の記事に、mDzod dge のある王が三人の妃を迎え、それぞれの妃がもうけた王子に支配させた地域名を示すものがある。それを見ると、第一王妃 Reb bzaḥ の子について

che ba Reb bzaḥi bus rMe stod bzuṅ baḥi rgyud pa deṅ saṅ mDzod dge stod mar gragsパ yin/

長子、Reb bzaḥ の子は rMe stod を掌握、その系統は今日 mDzod dge stod ma と云われる者達である。

といい、次子其他については、

ḥbriṅ po sTag riṅ bzaḥi bus rMa, rMe, rKa gsum gyi bar nas sa bzuṅ baḥi rgyud pa mDzod dge byams me daṅ/ mtshams çig Thaṅ bzaḥ shig blaṅs paḥi rgyud pa gyes pa Thaṅ sgor thogs/

次子、sTag riṅ bzaḥ の子は rMa, rMe, rKa の三つの河に挟まれた地を掌握、その系統が mDzod dge byams me であ

る。また、一頃（王は）Thaṅ bzaḥ なるものを娶っていたが、その系統が発展して Thaṅ sgor を掌握した。

と示している。ここで長子の支配した地に rMe stod を挙げ、その後裔を mDzod dge stod ma としている。mDzod dge stod ma の地[146]は、彼等が留った地の故に、その名を得たことは勿論で、先に挙げた麦桑や墨窪の東北に、今日の地図[147]で獨嫣と示されているのがそれであろう。清代の地図[148]では上作格、上作爾革と記るされている。次子の占領した Byams me[149]は三つの河に挾まれ、mDzod dge stod ma の西北に接する[150]。Thaṅ sgor は今日の唐哥[151]であることは論をまたない。

mDzod dge stod ma の一族が掌握した rMe stod は、rMe chu の上流域 stod の地を指す。rMe chu は、勿論 rMe yul を流れる河であるところからその名を得たのである。以上のことから、dMe tshaṅ, dMe tsha や dMeḥi sa はいづれも rMe yul のうちに含まれていたための地名と見てよいであろう。

そこで、「rMe yul を含む gSer ḥdzin gSum」の意味をしらべて見よう。先づ、gSer ḥdzin であるが、これは gSer poḥi sa ḥdzin pa「gSer po の地を掌握せるもの」の意で、mDo smad g-Yar mo thaṅ に君臨した rLaṅs 氏の三系 g-Yu pa, Ru dpon, gSer pa[152]の最後のものを指す。Ru dpon の系統が金川を領したことについては、既に見た。gSum は rLaṅs 氏を含めていう部族名 Sum pa の Sum の意であつて、「三」の数を示すものではない[63]。gSer pa は、gSer ḥdzin と同義で、gSer po pa、「gSer po を所有するもの」を意味する。rLaṅs 氏の母系の一つである Hor gser と関係がある称かどうかも問題になる[153]。

gSer po は The bo に近い[154]地の住民の称であり、同時に土地の名ともなつている。中国文献では雪児卜[155]と書い

たり、gSer のみを殺鹿[156]とか、色[156]と写している他、意訳して「黄勝」とも示している。gSer は「金」を意味するからである。また、漳臘堡も gSer po の音訳かと疑われる。この漳臘(堡)の古典は t'söng lāp (pou)[157]となり、gSer po に近いが、やや疑念も残るので、まづ、漳臘について、その他のことを調べて見ることにしよう。四川通志には[158]、

漳臘堡、今為二漳臘営一、在二庁西北四十里一、即潘州城故址也。洪武十一年建、宣徳二年為二羌番所レ拠、景泰六年復収二其地一、又明初置二於下潘州一、後徒而南、嘉靖二十年於レ此築二城堡一、置二官軍一、国朝改為二漳臘営一、

とあり、漳臘は昔の潘州城のあとに嘉靖二十年に堡として設けられ、後、漳臘営となつたものとある。潘州故城は下潘州にあつたが、その機能が果せず、松潘として松州に併合されたことも暗に示されている。潘州については、松潘県志にも引用される天下郡国利病書に[159][160]

古蹟志云、潘州故城在二衛北七百五十里一……宋時分二上中下三潘州一、今阿失寨即上潘州、斑斑簇即下潘州、介二二州之間一則中潘州也、其地愈北山愈平、旧漳臘之設在二下潘州一、

とあつて、広義の潘州は上中下に分れること、先の引用文に示された漳臘のある下潘州、即ち古潘州は狭義の潘州であり、斑斑と呼ばれていたことなどが右の引用文から確認できる。右の文中に阿失寨とあるものを四川通志で、阿尖寨と誤り挙げる場所[160]もあるが、あきらかに、阿失は阿細[161]の異字で、阿尖は誤りである。また、斑斑は ḥPhan po の対音であることも躊躇なくいえる。潘州が ḥPhan po に対する中国の呼称であることは、松潘をチベット文献で Zuṅ ḥPhan と一般に写す[162]ことから簡単に割り出すことが出来る。つまり、狭義の潘州は、下潘州の名にもかかわらず本来の潘州であり、チベットで ḥPhan po と呼ばれる地であつた。四川通志[163]には潘州営について

雍正八年創二設官兵駐防一、統二轄附近番夷、其南一百八十余里一名二達建寺一。距二黄勝関一一百二十里為二潘州一、黄勝適中地亦設二官兵戍一守

と示す。達建寺とは、gSer chu の源に近い大建寺をいうのか、あるいは、rGya mkhar thaṅ にある dGaḥ ldan dar rgyas gliṅ を云うのであろう。「寺院総攬」には後者に関する記録が残っている。[164] この潘州は黄勝の中心とされているから、狭義の潘州で、黄勝は広義のそれである。[165] 従って、潘州と黄勝関との距離も明示され、それが、次に示される班佑から黄勝関への距離と一致する。四川通志[166]によれば、松潘土司中、黄勝の地に位を占めるのは、次の班佑寨土千戸で、其地の位置は

東至二一百二十里一交二黄勝関汛界一
南至二一百六十里一交二阿革寨界一
西至二六十里一交二上作爾革寨界一
北至二一百里一交二巴細蛇住寨界一

となる。西は上作爾革 mDzod dge stod ma、北は巴細蛇住、dPal çes Brag çul[167] で、崇路 Tshoṅ ru、作路 gZaḥ ru に接する地であるから、[167] 班佑は下潘州に他ならない。従って班佑は ḥPhan yul の対音とされうる。ここで加わったことも綜合すると、本来の潘州は ḥPhan po または ḥPhan yul と呼ばれ、別に漳臘とも称せられたのである。

一方 gSer po の意訳と考えられる「黄勝」は、天下郡国利病書に[168]

黄勝在二漳臘西南十里一

ともあり、漳臘、つまり下潘州の西南にあると示されるから、この一句による限り、かなり限定された地域になる。しかし、同書に[169]、

虹橋西北十五里為二絶寨墩一、北界二黄山尖、殺鹿塘、黄勝草場等処路通二洮岷一

とあるのによれば、殺鹿塘は gSer thaṅ で、特定地名の音写であるのに対し、黄勝草場の「黄勝」は草場地帯をもつ「黄勝」の意で、広い意味が託されている。先に、潘州を以て「黄勝適中の地」となすとあつたが、この「黄勝」も、潘州（下潘州）の西南十里にある狭義のものとしては意味が通じない。従つて、「黄勝」には下潘州を中に含む広義の意もあると見なければならない。おそらく、この「黄勝」はまた広義の潘州にあたるのであろう。

今引用した文には gSer の対音をとどめた殺鹿塘（gSer thaṅ）の名が見られた。同じ名は「寺院総攬」の中に gSer thaṅ dgon として示され[170]、同書「本論」には、gSer thaṅ（殺鹿塘）、または gSer gyi thaṅ（色既塘[171]）に源を発する gSer thaṅ gi chu、即ち、岷江本流のことが述べられているが[172]、次にいう gSer chu と混同した記事になつている[173]。「gSer chu は gSer po gçoṅ[174] から流れ出て、Has shi span から一日行程の地で ḥBru chu と合流し、Ke ju mkhar[175] を経て南流する」という。これは、上包座[176]に源をもつ祥芝河[177]が ḥBru chu 合流して白水江になるのを示すものである。

gSer po gçoṅ は、先に三潘州を説いたところで「其地愈北山愈平」とあつたように北よりにある高原をいい[178]、今し方見た南よりの gSer thaṅ 殺鹿塘、色既塘とはかなり隔つた場所にある。gSer po の名はこの他にも見出

され、最初に見たように The bo の南に拡がるかなり広い地域を指すようである。[179] 広義の「黄勝」という訳語はこれら gSer の地の全域を指し、「漳臘」はその対音でありながら、gSer po の本拠である下潘州のみをいうのに用いられている。以上のように、潘州には広狭二義の示し方があるが、いづれも、gSer po と呼ばれる名の訳語と対音の双方を用いて示される。訳語は広狭二義とも「黄勝」一語で表されるが、対音を用いる場合、広義の gSer (po) は「殺鹿」、「色」、「雪児」などで写され、狭義のそれは「漳臘」を用いて示される。但し、狭義の場合では、訳語の「黄勝」と、対音の「漳臘」とでは同一地点をささないことに注意したい。

gSer ḥdzin gSum pa、または gSer pa は、以上の所論から ḥPhan yul, ḥPhan po の領有者であつた rLaṅs 氏を指すことがわかる。ḥPhan gtogs rLaṅs[180] というのと同じであろう。gSer po を掌握したという意味で gSer ḥdzin, gSer pa と云われているのであろうが、その gSer po は、かりに有名な東女国を形成した sBraṅ 氏を指すとしても、どこにいた何時頃の gSer po をいうのかまだわからない。[181]

rLaṅs Po ti bse ru[182] によれば、gSer ḥdzin の rLaṅs を含む mDo smad g-Yar mo thaṅ の rLaṅs も、Tsoṅ kha bDe yoṅs の rLaṅs も、mDo khams の rLaṅs も、すべて ḥPhan po che rLaṅs を祖として発展している。ḥPhan po che とは、ḥPhan po rje[183]、即ち「ḥPhan po の主」という意味である。ḥPhan po che の先がどこから来たかは別の機会にのべるが、rLaṅs Po ti bse ru で知られる限りは、「潘州王」(ḥphen po che) が祖である。「明史」[184] には、

宋時吐蕃将潘羅支領レ之、名二潘州一

とある。潘羅支は ḥPhan la che（＝ḥPhan bla rje）の対音であるから ḥPhan の王、「潘州王」の意である。「明史」の説明は逆であり、潘州を領したが、潘州王としての光栄を一身に負つたから得た称で、彼の名に基く地名ではありえない。[185] 彼の活躍は「宋史」によれば、[186] 主として Tsoṅ kha 地方であつたから、Tsoṅ kha bde yaṅs の rLaṅs に属するか、又は、彼によつて rLaṅs 氏一族が Tsoṅ kha 方面に発展する機会を得たのかも知れない。

いづれにせよ、この班佑 ḥPhan yul は mDo khams の sDe dge を含む ḥPhan yul[187] とは全く別であることを銘記しなければならない。

その位置は sTon 董氏に属する rÑa pa の東側にあり、[188] このことと「白蘭の右に多弥がある。」という中国史料の証言とを併せて想いうかべたい。

rLaṅs Po ti bse ru には、その聖者の一人が Sum pa Tsha ba kluṅ sgaṅ riṅ mo[189] に来た折、Roṅ chen Kha ba dkar po[190] を訪れた旨をしるすにもかかわらず、Tsha ba roṅ の rLaṅs 氏について示すところが全くない。Tsha ba roṅ[45] の rLaṅs 氏については、極めて興味深い事実がひき出されるが、特別に扱わねばならないので、ここでは、必要な範囲で概略を紹介するのに留めたい。

Tsha ba roṅ は、屢々その西にある rGyal mo roṅ と併せて、rGyal mo Tsha ba roṅ[191] の名で呼ばれる。Tsha ba roṅ に拠つていた部族は、清朝史料で、猓夷または猓猓夷と呼ばれ、[192] チベット史料では、Kho または mGo/sGo/rGo[193] としるされる。

Tsha kho 雑谷というのは、Tsha ba roṅ の Kho という意味で、彼等の住地を指す名ともなつている。ただ、

Tsha kho は、Tsha kho ḥPhan とも呼ばれ、ḥPhan po の rLaṅs 氏に所属し、後代では、rLaṅs 氏に同化吸収され、その姓の一つを示すものに過ぎなくなつた。(194)

Tsha kho の西にある rGyal mo roṅ の四土、俊磨 So maṅ、松岡 ḥDzi ḥgag、卓克基 lCog rtse、党項 Dam pa は、殆んど、sBraṅ(195) 姓を名乗る女王の国であるが、早くから rLaṅs 氏の母系を構成し(188)、特異な社会形態を残しながらも rLaṅs 氏に吸収統合されていつた。これらの女王国は今日の四土に移る前に、Rab brtan, bTsan la 儐拉などにあつて(122)、いわゆる東女国を形成していたのであるが、その頃、既に rÑa pa を母系とした ḥPhan po の rLaṅs 氏の支配を受け、更に、彼等を父系としていたことが、他ならぬ東女国伝から知られる。

Tsha kho 雑谷の地は、白蘭のあとに唐が置いた恭州の位置(48)にほぼ相当することを本論のはじめに述べた。rLaṅs Po ti bse ru には、rLaṅs 氏の所領としてこの地名を特にあげていないが、Ru dpon 系統の領した金川方面と、gSer pa の拠つた潘州地方や rMe yul との中間に当り、しかも、既に見たように、確かに、ḥPhan po の rLaṅs 氏に属する。従つて、gSer ḥdzin gSum の gSum によつて指される本拠として最もふさわしいのが、rGyal mo roṅ も含めた Tsha ba roṅ の地のように思われる。事実、Deb ther rgya mtsho には、この二地を指して ḥGag dog (mo) gSum (III. f.259a), rgyal sa gSum (III. ff.259 a, 265 a) Tsha ba khag gSum (III. f.265 a) などと呼んでいるので、rGyal mo tsha ba roṅ をもつて gSum yul そのものと断定したい。とすれば、gSer ḥdzin gSum としるすのみで、rLairs 氏の拠点として rGyal mo tsha ba roṅ の名を別に挙げる必要は rLaṅs Po ti bse ru にもなかつたからである。

四、むすび

Sum yul にある部族として、敦煌文書は ḥBal, rLaṅs, Kam の三氏の名を教えてくれた。既に見たところでは、ḥBal 氏は、rLaṅs 氏の拠点の一つと見なされる ḥPhan yul 潘州の北側で、ḥBal chu よりも南にあつた様子が読みとられた。rLaṅs Po ti bse ru によれば、rLaṅs 氏は吐蕃に帰属する以前から ḥPhan yul にいた筈である。とすれば、ḥBal 氏と rLaṅs 氏との境界は、吐蕃時代もほぼ潘州の北側にあつたと見てよいであろう。Kam 氏の位置を知る具体的な史料はなく、彼等が Thoṅ myi 多弥と境を接していたらしいという以上の結論は出なかつた。ḥBal 氏が吐蕃の中央では、rLaṅs 氏以上の権勢をもつていたが、後代の記録による限り、mDo smad 地方では、rLaṅs 氏の方がより広い範囲にわたつてはつきりした跡を留めている。Sum yul の名は Sum pa gLaṅ の Gyim ɕod とか、gSer ḥdzin の gSum とか、専ら rLaṅs 氏との結びつきで現れる。更に、Sum pa Hor という云い方で見られる Hor は、本論で実証する機会を得なかつたが、rLaṅs 氏の母系 sBraṅ 氏が Hor gser 種であつたためであり、この Sum pa も rLaṅs 氏を代名するものである。このような見方で、もう一度 Pelliot 文書 1286 を見ると、ḥBal 氏が Sum yul の ya sum にあつたというのは、rLaṅs 氏の占拠した Sum yul の yar、つまり山手の "sum" いいかえれば、「一角」にあつたということではないかと考えられる。[196] luṅ sum, khra sum と共に ya sum も普通名詞と見てよい充分な根拠があるからである。[196] Kam 氏も rLaṅs 氏に同化吸収された Khams pa として見れば、Sum pa の実体は rLaṅs 氏そのものということになる。その意味で、彼等を Sum

(yul の) rLaṅs と解し、「参狼」をその対音と見、また、ḥBal 氏を白馬種の子孫と考えるように道は開かれるが、別稿に譲って考察したい。

Sum pa の rLaṅs 氏は、その西側に rÑa pa に代表される sToṅ の部族を控えていた。この関係をチベット文献は屢々 sToṅ Sum pa という云い方で示している。尤も、rLaṅs 氏は rÑa pa を母系に迎え、自らも rÑa çtsi ととなえ、ḥPhan po の rLaṅs の系統には、rÑa pa に血をひく三家が繁栄した様子であり、彼等の中に sToṅ 董を名乗っていたものも認められる。[197] この点を考慮に入れると、sToṅ Sum pa は sToṅ を母系とする rLaṅs 氏一党に対する称となり、筆者がかねて口にしている複合部族の問題に、この点から一つの解答を加えることにもなるが、ここでは割愛する。

rLaṅs 氏が白蘭または参狼種で、ḥBal 氏が白馬種に当り、両者に共通の「白」には特別の意味があることと、更に、越嶲に拠った氂牛種 (mDzo/Mosso) も、彼等の同族と見做されることを考証しない限り、この問題の最終的決論はない。今は、白蘭と Sum pa の rLaṅs が、ほぼ同じ位置を占拠していたことを云うに留めた。なお、rLaṅs 氏の拠ったところのうち、rGyal mo tsha ba roṅ は狭義の Sum yul であり、Gyim çod や、gSer po、rMe yul はその属地として広義の gSum yul と云えるのであろう。

Sum pa が、Sum pahi ru に編成された蘇毗とは全く距った所にあるという筆者の主張だけは少くとも裏づけられたと思う。

(東洋文庫研究員)

参考文献

ADC: B. Karlgren: Analystic dictionary of Chinese and Sino-Japanese, Paris, 1923.

AFL: F.W. Thomas: Ancient folk-literature from north-eastern Tibet, in Abh. d. Deutsch. Ak. de Wiss. zu Berlin, kl. f. Sprachen……no 3, Berlin, 1957.

AHEL: H.E. Richardson: Ancient historical edicts at Lhasa and the Mu tsung-Khri gtsug lde brtsan treaty of A.D. 821–822 from the inscription at Lhasa. London, 1952.

AMR: J. F. Rock: The Amnye ma-chhen range and adjacent regions, Serie Orientale Roma XII, Roma, 1956.

BCh.: Bon chos dar nub gyi lo rgyus grags pa rin che glin grag ces bya ba dmoṅs pa bloḥi gsal byed. 93 fol. (dbu med)

DG.I: dKon mchog bstan pa rab rgyas: yul mdo smad kyi ljoṅs su thub bstan rin po che ji ltar dar baḥi tshul gsal bar brjod pa deb ther rgya mtsho. 412 fol., 1865?, bKra çis dkyil.

DG.III: dKon mchog bstan pa rab rgyas: Kha gya tsho drug ṇas rGyal mo tsha ba roṅ gi bar gyi dgon grub sde phal che baḥi dkar chag tho tsam bkod pa 272 fol., 1865?, bKra çis dkyil.

DGG: Tshe dbaṅ rdo rje rig ḥdzin: dPal sa skyoṅ sDe dge chos kyi rgyal po rim byon gyi rnam thar, dge legs nor buḥi phreṅ ba ḥdod dgu rab ḥphel. 56 fol., 1828. sDe dge.

DzG: bTsan po sMin grol no mon han: ḥDzam gliṅ chen poḥi rgyas bçad. 146 fol., 1820, cf. GT.

DNG: gShon nu dpal: Deb ther sṅon po, 486 fol., 1476–78, trad. G. N. Roerich, The Blue Annals, Culcutta, 1949, 1953, 2 vols.

DTH: J. Bacot, F. W. Thomas, Ch. Toussant: Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet, Paris, 1940.

FHT: G. Uray: The four horns of Tibet according to the royal annals, Acta Orientalia Hung. X, 1960, pp. 31–57.

GT: T. Wylie: The geography of Tibet according to the 'Dzam gling rgyas bshas, texts, tr. & notes, Roma, 1962.

HBC: dPaḥo gtsug lag ḥphreṅ ba: lHo brag chos ḥbyuṅ (=mKhas paḥi dgaḥ ston), 1545–1565, vol. Ja.

LG: La dvags rgyal rabs. ed., trad., A. H. Francke; The

chronicles of Ladakh and minor chronicles (Antiquities of Indian Tibet II), Calcutta, 1926.

LPS: rLaṅs Po ti bse ru. 61 p. (Rai Bhadur gDan sa pa's)

LS: kLoṅ rdol bla ma: Ñag dbaṅ blo bzaṅ gi gsuṅ ḥbum, vol. Ka–Ā.

NTS: P. Pelliot: Note sur les T'ou-yu-houan et les Sou-pi, Toung Pao XX, 1921.

PSJ: Ye çes dpal ḥbyor: dPag bsam ljon bzaṅ, 317 fol., 1748, dGon luṅ Byams pa gliṅ.

P. collection of P. Pelliot.

TAMS: R. A. Stein: Les tribus anciennes des marches Sino-Tibétaines, légendes, classification et histoire, Paris, 1958.

TLTD: F. W. Thomas: Tibetan literary text and documents concernning Chinese Turkestan, London, 1935 (I), 1951 (II).

「古チ研」　佐藤長′古代チベット史研究′上下二巻′京都′昭和三三年′三四年。

「顧チ支」　山口瑞鳳′顧実汗のチベット支配に至る経緯′岩井博士古稀記念典籍論集′東京′昭和三八年。

「蘇　毗」　山口瑞鳳′蘇毗の領界′東洋学報′五〇―四。

「中　図」　張其昀主編′中華民国地図集′台湾′一九六〇。

「吐遣考」　松田寿男　吐谷渾遣使考　史学雑誌四八―一一′一二。

「吐南北」　和田博徳　吐谷渾と南北朝との関係について　史学二五―二。

「吐二問」　後藤勝　吐谷渾に関する二三の問題′史潮′五八。

其の他の文献

通典′元和郡県図志′冊府元亀′唐会要′四川通志(嘉慶)′松潘県志(民国)′狄道州志(乾隆)′洮州庁志(光緒)′岷州志(康熙)′理番庁志(同治)′懋功庁志(光緒)′章谷屯志′金川瑣記′蜀徼紀聞′天下郡国利病書′聖武記′その他′正史

註

(1)　女国をめぐつて登場する蘇毗は′女国の姓 Suvarṇa の対音の一部「蘇伐」を誤り伝えたものであり′実は′蘇毗と関係がない。この問題は佐藤長氏によつて解明された。「古チ研」′一四一―一四三頁参照。

(2)　新唐書′二二一下′西域伝。

(3)　NTS, p.330.

(4)　羽田亨′ポール・ペリオ共編「敦煌遺書」第一集′釈迦牟尼如来像法滅尽之記解説

(5)　TLTD. I, p.42, p.156.

(6)　「古チ研」′一四〇頁′TAMC, pp.41～42 参照。ibid. p.44 には蘇毗′孫波′女国′東女国の相互の関係につ

いて、学界の最終的な意見が反映されている。

(7) 「蘇毗」、二八頁、同註24参照。

(8) FHT, p.53. 及び、TAMC, p.43 参照。

(9) 蘇毗の東境は hBri chu 金沙江で仕切られている。「蘇毗」、特に、二八頁参照。

(10) 「蘇毗」五八—五九頁と、同註119参照。

(11) 「白」については、rLans 氏の祖について述べた別稿(未刊)で扱った。白蘭、白馬、白狼の場合、「白」を分離して考えるが、白狗の場合についてはまだ結論を得ていない。cf. TAMC, p.40, n.108.

(12) 氂牛種は白馬、参狼と共に無弋爰剣の末裔とされ、越嶲羌とも呼ばれる。(後漢書、八七、西羌伝) 彼等のうちには、Sum yul の hBal. rLans 氏と共通する馬、郎の二姓が認められ、所在地には白路、虚郎、古伯樹の地名があり、また、集団としては麼麼とも呼ばれる(四川通志、越嶲庁志)。この称は明らかに mDzo の対音で、氂牛の原語を示し、いわゆる Mosso である。敦煌文書では、Sum pa を mDzo Sum pa と呼んで、Sum pa にも mDzo の称を加えている(DTH. p.111.)。この地方の白夷、白猓、白蛮と彼等の関わりも、ほぼ推測される。

(13) 東女国と女国を Dags po lha sde との関連を通じて結びつけ、四川と Shan shuin の両女国が全く同系であること論じて別稿(未刊)とした。他方、大羊同 rKyan rgod の東遷を rLans 氏の祖と共に論じて見た(未刊)。

(14) 「吐遣考」、略号表参照。

(15) アジア歴史辞典、「白蘭」の項で、船木勝馬氏は松田氏の説を要約紹介している。また、「吐遣考」以後の主要論文でも、異説は見られない。

(16) 「吐遣考」一三八六頁、「元来白蘭は山名といわれる。それが青海の西南に当つていたことは異論がないにしても、その的確な位置は未だに求められない。」という。白蘭が青海の西南にあるとする根拠は、吐谷渾を青海中心に見たためにある。(一三九二頁参照)

(17) 「吐遣考」一三九二頁。

(18) 筆者が比定する白蘭の地域内では、雑谷の南に「巴朗山」があり、「巴朗拉」とも示されるが、蜀徼紀聞(小方壺斎輿地叢鈔)によると、「斑爛山」と以前に写されていたものである。おそらく、hPhan rLans 山の意であろう。

(19) 吐谷渾と多弥との間に白蘭を入れるとすれば、白蘭は黄河大屈折部の mDzod dge Byams me あたりになろう。唐会要、巻九七、吐蕃の項に見える。

自二中国一出二鄯域一五百里、過二烏海一入二吐谷渾部落、弥、多弥、蘇毗及白蘭等国一至二吐蕃界一

は、烏海は七烏海で Kara nor を、吐谷渾部落は赤水方面

（註92参照）に拠つた吐谷渾を夫々指すのに違いない。弥、多弥、蘇毗、白蘭等の国が境を接する地帯であるから、烏海を過ぎた後、そのいづこにも向うことが出来、それらの国を経て吐蕃に至ることが出来るとの意に解される。ただ、白蘭に入れば廻り道になる。註86参照。

(20) Tshvaḥi ḥdam は「塩の沼」の意である。従つて塩沢道行軍副総官はこの地に軍を率いたのであろう。同じ頃、別に白蘭道行軍総官の称があり（冊府元亀、巻九八五、外臣部、征討四、貞観九年七月と十二年八月の条参照）、一つの Tshvaḥi ḥdam に塩沢、白蘭と別の名が与えられたことになる。

(21) 吐谷渾の西方進出について、松田氏が宋代拾寅の時とした（「吐遣考」一四八八頁）のを和田博徳氏は訂正して、梁代の伏連籌の時代にあると主張する（「吐南比」九五―九九頁）。青海の西に伏俟城を築いて可汗を称したのは、その子夸呂の時である。（周書、巻五〇、隋書、巻八三、北史、巻九六、各吐谷渾伝参照）註32参照。

(22) 「吐遣考」一三七九頁　註16参照。

(23) 「吐遣考」一三八三頁

(24) 「吐遣考」一三八七頁

(25) 「吐遣考」一三七九頁、「従つて吐谷渾が洮水（洮河）の西、いわゆる河南の地から湟水の流域にかけて、まづ勃興し、更に西方青海の地方を含めて白蘭にまで彊を拓いたことは殆ど疑いを容れない。」註21参照。

(26) 通典、巻一七四、州郡四では、夏州の領県の一つに枹罕を示し、註に「故羌侯邑、漢為二枹罕県一也」とある。松田氏によれば、「罕开は枹罕県で、後の夏州であり、今の甘粛省臨夏県の地方に相当する。」（「吐遣考」一三七九頁）という。

(27) 松田氏は、「甘松は山名で唐代の合川郡、すなわち甘粛省臨潭県の西南に当り、」とし、通典（巻一九〇）吐谷渾条の原註「甘松山在二今合川郡境内一……」を註記する。（「吐遣考」一三七九頁）。合川郡は通典（巻一七六）によれば、疊州ともよばれ、隋代には同昌郡（扶州）に属し、その西北部をなし、同じく隋代では同昌郡に属した松州の東側に位する。通典（巻一七六）の松州（交川郡）の条には、領県の嘉誠の註に「有二甘松嶺一江水所発之源」とあり、元和郡県図志（巻三一）の松州嘉誠県の条に「甘松嶺在二県西南十五里一」と示される。松潘県志（巻一）山川には、甘松嶺について「県西北百十五里羊膊嶺下、後魏甘松県以レ此名、隋志通軌県有二甘松山一、新唐書開元十九年吐蕃請下交レ馬二於赤嶺一互市於甘松中嶺上、宰相裴光廷曰、甘松中国之阻不レ如レ許二赤嶺一、赤嶺在二陝西西寧衛一、……山海経、甘松嶺亦謂二之松葉嶺一、江水発二源於此一、土人謂二之松子嶺一」と、ま

とめてあるのが見られる。本文（28頁以下）に見る rLaṅs 氏の根拠地 gSer po、「黄勝」の東側にあり、「松子嶺」とは恐らく Sum rtsi の対音であろう。開元年間にこの地点は唐と吐蕃との境界線上にあつたことがわかる。

甘松山の位置が枹罕の東側になく、南にあることから、宋書からの引用文は、本文のように読み方が限定される。北部の枹罕から南部の甘松までと述べ、枹罕には東千余里を含め、甘松にはその西にある河南と南にある昂城竜涸を含めている。「自二洮水一……」は、それらを別の言葉で総括しているわけである。隋書、北史、通典では「甘松之南」とか、「甘松南界昂城竜涸」として、誤解し易い「以東千余里」を全く削つている。

(28) 通典(巻一七四)に「大唐為二洮州一、或為二臨洮郡一」と示し、領県の臨潭の条に「有二洮水源一出二西傾山一」とある。洮河についてのくわしい記述は、洮州庁志、巻二、川の冒頭に示されている。岷州志（巻二、山水）には、「洮河在二城北一里一、漢書地理志源出二西傾山一、経二岷山下一過二溢楽鉄城一至二臨洮府界一北入二於黄河一」と示す。なお、洮河の源を潘（州）大分(水)嶺におく松藩志の一文が、狄道州志（巻一山川）に紹介されている。松潘県志、巻一、山川には「〔疊蔵河〕俗名二包座河一（＝桓水・恒水）源出二県北羊膊嶺東麓廃疊州包座生番地一東北流入二洮河一」とある。つまり、南から、臨潭に近い Co ne の方へ流れて洮水に入るのである。洮水はチベット語で kLu chu (DG. III. f. 195 a) という。黄河に注ぐこの地域の三つの河について Deb ther rgya mtsho (I. f.273 b) は次のように云う。「Chu nag (AMR, p.54. Chhu-nag 参照) は北に向つて流れ、mGon ɣul chu dmar (AMR, 2) と一緒になつて dGu chu (臨務寺川) に合する。bSaṅ chu (大夏河) は東に流れ、南流する Khag chu は Kho tshe (黒錯) の中央を通つて Khyuṅ ḥbrog で kLu chu (洮河) と合流、dGu, kLu, bSaṅ (bSaṅ, kLu の順が正しい) の三河も順次黄河に合流する。」なお洮河源については AMR., p.54 参照。註176、177参照。

(29) 宋書、吐谷渾伝にあつたように、西零は西平郡で、今の青海省西寧県の地(「吐遣考」一三七九頁参照)。通典(巻一七四)によると、唐の鄯州、西平郡には領県が三つあり、鄯城が漢の西平郡の故城、他は湟水と竜支の二県である。いづれも黄河の北岸にあり、これらは今日の西寧、湟中の周辺地域と考えられる。

(30) 吐谷渾の慕璝は夏の赫連定を捕えて北魏に献じ、西秦王の称号を得て乞伏氏に代ることを許される。その直後の延和元（四三二）年、北魏に上表したのに答えて太武帝の言うには、

西秦王所レ収金城枹罕隴西之地彼自取レ之、朕即与レ之、便是裂レ土、何須ニ復廓一（魏書、吐谷渾伝）

とあつて、慕璝が領土を増廓して呉れとの要求を却けている。ここには、金城枹罕隴西の地が慕璝に取得さているのを指して、既に与えた論功行賞だとすましているのが見られる。尤も、乞伏氏の盛時は白蘭周辺におしこめられ、阿豺に至つて漸く生気を取り戻したが、宋から澆河公に封じられた程度に留るのだから、北魏のいうとおり、満足すべきだつたかも知れない。しかし、これ以後慕璝は南朝と通じ、北魏とは疎遠になるが、和田氏のいうやうな断交がこの時あつたとは見られない。（「吐南北（八六―八八頁参照）この後の慕璝は実力で西北部の西平に進出をはかつたに違いない。「吐遣考」一四七五頁参照）。四三六年に慕璝が歿し、莫利延が立つと、北魏は慕璝に恵王の諡を下し、その後、慕利延を西平王に改封した。また慕璝の子元緒を撫軍将軍とした。（魏書・北史、吐谷渾伝）これは事実上、慕璝の西平支配の実績を公認して、慕利延の称号に加えたと見るべきであろう。西秦王より西平王に格下げになつた（「吐南北」八八頁）、という見方でもこの点は変らない。

(31) 甘松の南が昂城竜涸であることになるから、宋書、吐谷渾伝の相応部分の読み方が拘束される。「西至ニ河南一　南界ニ昂城竜涸一」の西も、南も甘松からの西と南とになる。

(32) 西零（註29）とその占拠（註30）については既に見た。西零已西への進出については、松田氏は拾寅の時を以てあて（「吐遣考」一四七二―一四八八頁参照）、和田氏はこれを訂正して梁代のこととし、伏連籌のときにあてるべきを論じている（「吐南北」九五―九九頁参照）。和田氏は西域諸国と南朝との交渉が梁代においてしか認められない事実を、吐谷渾の鄯善、且末支配の時期と結びつけて考える。しかし、西域諸国は、北魏全盛の時代に、これにくらぶべきもない勢の南朝に何を目的として誼を通ずる必要があつただろうか。梁代は形勢が逆転したから、吐谷渾の勢力圏を通じて通貢したのに過ぎない。したがつて、吐谷渾の鄯善、且末方面への進出を、梁以前にはなかつたものと云う議論は成立しがたい。松田氏の挙げる拾寅よりも先の慕利延は、北魏と訣別し、南宋と結び、柔然との連絡に当る（「吐南北」九二―九四頁参照）が、北魏の攻撃をうけると、彼その祖先がしたように白蘭にすぐ逃げこまず、「西遁沙漠」（「吐遣考」一四八八頁参照）を試みている。其後に折を見て白蘭に逃げこみ、そこをつかれると、于闐に入り、その王を殺し（魏書・北史・宋書、吐谷渾伝）、更に罽賓まで南征したという（魏書・北史、吐谷渾伝）。于闐に攻め入つた慕利延に、若し、鄯善、且末などの地にその勢を盛り返す手段がなかつたら、白蘭から逃げ出した身の上で、

入二于闐国一殺二其王一、死者数万人（北史、吐谷渾伝）

などということは果して出来たであろうか。慕利延は七年を経て故里に帰るが、その活躍ぶりから判ずれば、北魏に攻めたてられるより先に、西域に経略の手を伸していたのでないかと充分疑えるであろう。

(33) 「甘松の南」というのは昂城竜涸を指していると見てよい。従つて、「甘松之界」や「甘松之南」だけで昂城竜涸の近辺を云うのである。吐谷渾の住地としてここだけが示される場合、六世紀後半、西魏によつてこの地に逐いつめられ、後周によつて徐々に旧領を奪われた（周書・北史、吐谷渾伝）ころの吐谷渾しか考えられない。（「吐南北」一〇〇―一〇二頁参照）事実、隋書は夸呂以前のことに触れていないから、彼の頃の吐谷渾を云つたのであろう。夸呂が青海の伏俟城に拠つたことは別に示されるから、「甘松の南」が吐谷渾の最後に残つた本来の地と見なされていたためかも知れない。

(34) これは、続いて「数千里中逐二水草一」と、くる一節を読み誤つて先の文に繋いだもので、白蘭が洮水の西南方遙か数千里中にあるのではない。この点は本文でやがて確かめられるところである。

(35) 隋書の場合でも、文字通りにとれば、葉延から樹洛干の頃の版図しか示さないわけである。

(36) 青海方面は、チベットに於ける地理的分類でも、つねに黄河以南の地域と区別して示される。黄河以南は mDo smad g-Yar mo thaṅ と呼ばれるのに対し、以北を Tsoṅ kha Gyi thaṅ と称す。Tsoṅ kha は狭い意味の A mdo で、黄河以南の mDo smad は広義の A mdo に含まれる。本文17頁、註81参照。また黄河の南北をもつて、byaṅ rgyud, lho rgyud というようにも分ける（D.G.I f.27 b）ことが知られている。

(37) 実際には、竜涸は松州の南部、翼州の北にあり、白蘭の東側にあたる。昂城も同じであろう。

(38) 「吐遣考」一三九五頁

(39) 「吐二問」三二一―三三頁、元和郡県図志、巻三二、剣南道中、翼州、同松州の条には

後周保定五年於レ此置二竜涸防一、天和元年改置二扶州領竜涸郡一。隋開皇三年廢二竜涸郡一置二嘉誠鎮一、与二扶州一同理焉。大業三年改二扶州一為二同昌郡領嘉誠県一。隋末陥二於寇賊一、武徳元年隴蜀平定置二松州一。貞観三年置二都督府一但為レ州。

とあり、周書吐谷渾伝に見える

天和初其竜涸王莫昌率レ衆降、以二其地一為二扶州一。

の事実を反映している。衛山県の北は唐の松州に当ることも先の引用で了解されるであろう。

(40) 元和郡県図志、巻三二、劍南道中、翼州、松州、茂州、通典、巻一七六、州郡六、交川郡、臨翼郡、通化郡参照。

(41) 「吐遣考」一三九四頁。ただし、白蘭を制したことは吐谷渾の拓疆とはいいがたく、西零已西への発展をいうものでもない。むしろ窮地にあつた吐谷渾の初期の事情を示す。註42参照。

(42) 沙州について、筆者は貴徳の西南に横たわる Maṅ ri bye ma の大沙漠（Mu ge thaṅ「飢餓の原」の南）をこれに当てるべきかと考えている。（AMR. p.88 参照）白蘭王の実質的な権力範囲が、視黠に与えようとした冊号の上に見えるものとすれば、竜涸より西側に白蘭があつたことになる。とすれば、宋書、吐谷渾伝に慕（利）延について

　慕延索三部落一　西奔二白蘭一。

とある「西」も、慕璜の頃、手中に収めた西平方面（註30参照）から見た西側でなく、本来の所領としての「甘松の南」（註30・33参照）から見ての「西」であることになろう。

(43) 冊府元亀、巻九七〇、外臣部、朝貢三にも、

　十二月白簡白狗羌……遣使朝貢

とある。ここでも白簡と誤記されている。

(44) 「四川通志」巻六、輿地、沿革の雑谷庁の沿革表によると、維州は宋代から威州となる。

(45) 雑谷の沿革については四川通志にくわしい（註44参照）。この称はチベット語名 Tsha kho の対音であることは明らかである。Tsha kho は Tsha ba roṅ の Kho（猓または猼猓夷）という部族に対する呼び名であり、この Kho は Kho ḥPhan とも云われ、ḥPhan po 潘州出身の rLaṅs（白蘭）に同化された Kho を云うのである。東女国の宰相として示される「高覇」Kho pa はこれであり、白狗の狗も、或は Kho の対音かも知れない。

(46) 旧唐書、巻一九八、西戎伝、党項羌。新唐書、巻二二一、西域伝、党項の条参考。南会州に関しては、元和郡県図志、巻三二、劍南道中、茂州の条に「武徳三年改置二南会州総督府一、貞観八年改為二茂州一……」とある。

(47) 四川通志、巻六、輿地、沿革、松潘直隷庁沿革には、

　唐武徳元年復於二嘉誠県一置二松州一……明洪武十二年置二松州、潘州二衛一、尋併為二松潘衛一

とある。潘州は松州の西北にあつた（本文29頁以下参照）が、実録によると、十七年十月に「松潘二州羌民作乱」とあり、通志には、「二十年改二松潘等処軍民指揮司一隷二四川行都司一」と示されている。

(48) 恭州は拓州（蓬山郡）の西にあり（元和郡県図志、巻三二、通典、巻一七六、恭州または恭化郡）、拓州は静州の西乃至西北にあつた（通典、巻一七六、蓬山郡。元和郡県図志、巻三二、静州。通典、巻一七六、静川郡）から恭

州は静州の西になり、静州自体は当州の、当州は松州の西南になるから、恭州は松州の西南になる。維州、茂州から見たところは、本文9頁に見たとおりである。

(49) 「蘇毗」二四頁、同註112、119、121参照。sTon sde と mDzod dge とに関しては本文18頁以下を参照。

(50) 今日の白利は、甘孜 dKar mdzes のすぐ東、徳格 sDe dge の西方に見られる。しかし Pe ri kha ḥga (「蘇毗」一八—一九頁参照) とか、白利登馬 (Pe ri stod ma、「蘇毗」註113参照) はもつと西北に位する。白利登馬は蒙古爾津の西にあり、蒙古爾津の東端は敦春木格爾則 (Thoṅ sum dge rtse) といい、多弥との関連をその名で示しているように思われる。

(51) 「蘇毗」註52参照。但し、隋書や北史の附国に当てることは出来ない。というのは附国伝に模徒が別に示されているからである。「附」は Bod 以外の対音と見る方がよいように思われるので訂正して置きたい。

(52) 「蘇毗」一〇—一八頁参照。

(53) rDza chu と rMa chu との間に ḥBri chu があり、前二者の間に挟まれた地を rMa rdza Zab mo sgaṅ、或いは、ḥPhan yul Zal mo sgaṅ という。(「蘇毗」註117参照) この ḥPhan yul の西南よりの一帯を指すことになる。

(54) 「蘇毗」註130、134参照。筆者は、本論を含めて最近整えた論文中に、党項と Mi ñag との関係を辿つて見たが、党項として rLaṅs の東部にいる蘇 Seḥu と甲 rGya とを大別出来たばかりで、他に、rGya roṅ/rGyal mo roṅ の支配者のうちに Mi ñag との結びつきを示すものを見ることは出来なかつた。ただ、小金川の南に羅女蛮と美諾の地名とを確認し、これが Mi ñag と関係のあることを知つた (DzG, f.77 a 参照)。然し、東部の党項とこの Mi ñag との間の関連はまだ確かめられていない。

(55) 羅女蛮は Lo ñag の対音に違いない。羅は羅羅または猓羅で、黒白二種あり、そのうちの黒夷、黒猓羅、或いは烏蛮と呼ばれるものに当る。猓羅、羅羅は kLa lvo の対音で、昔の嘉良夷を指す。Ga ro は逆に中国音を写したものであり(「蘇毗」註60参照)、いわゆる Lolo と同一である。

(56) 「(Li thaṅ) から北東に Ñag roṅ という国があり、その上手の地には盗賊を専らとする一群があり、下手には Li thaṅ と Mi ñag の部族が混住しているが、……Li thaṅ から Ñag chu をわたつた東側には Mi ñag の国があり、そこには……、Mi ñag の北端、Hor khog と近いところにダライ・ラマ (七世の滞在した)、噶達なる寺院などがあり、それらの東側に rGyal mo roṅ がある。」(DzG, f.77 a)

(57) 旧唐書、巻一九八、西戎伝、党項。
(58) 「蘇毗」註134参照。
(59) 註54・56・58参照。
(60) 旧唐書、巻一九七、新唐書、巻二二一、東女国伝
(61) Sum pa は Supiya、So byi、蘇毗とされたため、その構成や所在についての研究は停滞した（「蘇毗」註24、133参照）。例えば、Thomas 氏のように、Ba laṅ ba Sum pa, Ba bdag Sum pa の住地を、単純に、西部チベットのうちに比定しようとする空しい試みがあつたに過ぎない（TLTD.I. pp.156–159）。（八世紀前半の東トルキスタン征討に東部チベットの Sum pa、ḥBal と rLaṅs とが責任をとつていた事実を見落したことによる。ibid. pp.159–161）。その他は、僅かに R. A. Stein 氏が lDoṅ Sum pa, sToṅ Sum pa の名称を通じてこれを逐求している。（TAMC pp.41–45）後者には Sum pa が Mi ñag の国境に配属された（les Sum pa installes dans le Mi ñag）というような見方がとられている。
(62) P. 1286
(63) 「蘇毗」註102に筆者は Sum paḥi gliṅ gi Gyim çod の gliṅ を普通名詞の「国」としたが、gLaṅ の誤写と考えるべきであろう。TAMC, p.72. 参照。
gSum pa gLaṅ gi Gyim bçod (BCh, f.24 b.) などとあり、rLaṅs Po ti bse ru のうちにも明らかにこの変形と見られるものが確かめられる。
"Sum cu pa rLaṅs yul Gyis çod brag çel" (15b)
"Sum pa gLaṅ gi skad (kLu ḥbum gtsaṅ ma f.107 a,)
と共に Bon 教文献に頻出する。
(64) 例えば、rLaṅs Po ti bse ru には
rLaṅs yul Gyis çod (15b)、rLaṅs yul gyi Gyim çod (48 a), rLaṅs yul Gyim çod (53 a)
と gLaṅs の代りに rLaṅs を用いている。
(65) DTH, pp.101, 111.
(66) mDzo Sum pa と示される（DTH p.111）。Sum pa の rLaṅs 氏の祖は、白馬と mDzo mo 牝氂牛をそのトーテムとする（LPS, pp.6 b–10 b）。この二つの動物から白馬種と氂牛種の名が浮び上る。氂牛種は越嶲羌のことで、麼麼、麼麽と写され、mdzo の対音を示す。（註12参照）白馬種、氂牛種と並ぶ参狼種は Sum rLaṅs の対音と解される。勿論 Sum yul の rLaṅs の意であり、麼麼の rLaṅs 郎（虚郎）氏と区別する称である。麼麼の ḥBal 馬（古柏、白路）氏と区別して、Sum yul の ḥBal を白馬とし、これに準じて Sum yul の rLaṅs を白蘭と呼んだつまり、白蘭は参狼の異称であると筆者は見るのである。
(67) DTH, p.111. Sroṅ rtsan sgam po 即位の直後は、

Yar klungs 王家の威命は充分行われなかつた。まだ、統一王朝の基盤が組織されておらず、Khri slon rtsan の権威は一代限りのものになりうるとも見做されていたのである。

(68) DTH, p.101.

(69) DTH, p.111.

(70) DTH, pp.107-108.「蘇毗」一四頁参照。

(71) Sroṅ brtsan sgam po の父、Khri slon rtsan 代に Seṅ go mi chen が Dags po lha sde を討つた。その結果、Dags po の sBraṅ 氏 (Suvarṇa-gotra=Gyim po=金氏) は三分し、一つは故地の Aboḥi Hor (Hor gser) に合流、他は金川 (Gyim ɕod) に亡命して rLaṅs 氏と結び、東女国 rGyal mo roṅ を形成、もう一つが、いわゆる Dags po として吐蕃王朝側に残つた。Sroṅ brtsan sgam po の最初の仕事は、王朝の礎を固めるため、いささかでも懸念の残る親族を粛正することであつた。Sum pa は東女国を抱えたため、先づ征討の対象となつたが、あつさり帰順したのである。六五六年にも大討伐をうけている。

(72) 七四六年以前に、単独で編年紀に見えるのは次のようである。(括弧内は西暦)

rTsaṅ chen gyi bruṅ pa Laṅ sa ɕhen (715)

blon sKyes bzaṅ ldoṅ tsab (729), (734), (737), (744)

通典、巻一九〇、辺防六には mGar Khri ḥbriṅ が郭元振につけて入朝させた (六九八年) 使者として、郎宗乞思若の名が、旧唐書、吐蕃伝上には (七三〇年) 名悉臘の副使として押衙将軍浪些紇夜の名が見られるが、いづれも rLaṅs であろう。

(73) DTH, p.102.

(74) DTH, p.56.

(75) この失脚については、sTag sgra klu khoṅ の顕功碑ともいうべき Shol の石柱南面の碑文に次のように示してある。(cf. AHEL pp.16-17)

「Khri lde gtsug rtsan 王の御代に Ṅan lam klu khoṅ は忠誠を尽して王業をたすけた。ḥBal lDon tsab と Laṅ Myes zigs とは共に大臣をしていたにもかかわらず、不忠を働き、父王 Khri lde gtsug rtsan の御身には禍が及んで昇天なされた。御子の王 Khri sroṅ lde brtsan の御身にも及ばんとし、黒頭チベットの政治を紛乱させつつあつたところを、kLu khoṅ が ḥBal と Laṅ との不忠を確認し、御子の王 Khri sroṅ lde brtsan のお耳に入れると、まもなく ḥBal と Laṅ との不忠がただされ、彼等は罰せられ、kLu khoṅ が忠誠を尽した。」

(76) HBC f.130 a. rLaṅ blon Khri sum rje spegʼ lha, ḥBal blon ḥBro ma, rLaṅ blon gSas slebs

(77) mṅan pon khab so ḥo chog gi bla ḥBal blon kLu

bzaṅ myes rma. (AHEL, p.74)

(78) 註49参照。

(79) LS. Ha f.4b. Bod chen po la mDo stod mDo smad gñis su phye nas/ mDo stod ni Bar Khams pa rnam daṅ mDo smad ni A mdoḥi yul la byed do/

(80) 但し、mDo khams の称は、sMad mdo khams とか sMad mdo khams sgaṅ drug というのと同じく、A mdo も含めた東部チベット一般を指す場合もある。sgaṅ drug と sgaṅ gsum とを全く同じに見る kLoṅ rdol bla ma の説明（註81参照）と、sgaṅ gsum の方は rMa rdza Zab mo sgaṅ, Tsha ba sgaṅ, sPob po ra sgaṅ である (DzG. f.75 a) として、mDo stod のみをそれによつて指させる説とがある。従つて、mDo khams sgaṅ gsum と称しても、人によつては A mdo も含むことがある。

(81) spyir mDo khams la sMad khams (btags) daṅ mDo smad la g-Yer mo thaṅ (btags) daṅ Tsoṅ kha la Gyi thaṅ btags paḥi khams gsum zer yaṅ/ (PSJ. f. 217 a)

右の khams gsum を sgaṅ gsum と置き換え、

smad mDo khams sgaṅ drug daṅ yaṅ na gsum zer shiṅ……mDo khams la sMa khams btags pa khams gcig/ mDo smad la g-yar mo thaṅ du btags pa khams gcig./ bTsoṅ kha la Gyi thaṅ btags pa khams gcig ste sMad mDo khams sgaṅ gsum zer ro (LS. Ḥa f.5a.)

としたものもあるが、三分法は変られない。

(82) もとの吐谷渾の地で、洮河 kLu chu, 大夏河 bSaṅ chu 臨務寺河 dGu chu の流域は mDo smad の北部に当り、甘粛省にある。

(83) lDoṅ mi ñag, lDoṅ sum pa の lDoṅ である。rLaṅs の母系に古くから入つており、一姓ともなつている。「蘇毗」註127参照。白狗羌が鄧を名乗つていたことは本文8頁に見たとおりである。

(84) 「蘇毗」一八頁、細封氏の投降は本文10頁で見た。後代、細封氏投降の地に残る土司には蘇氏が最も有力である。

(85) LPS. ff.49a, 53b. Khams pa go ca, Vairocana, f. 18 a. Khams の ru gsum とは別。註134参照、

(86) 「蘇毗」註119、121参照。筆者は先に敦煌文書 (P. 1285) の Myi btsan chom po ba ti をとりあげながら、Myi yul を物語的、神話的名称にすぎないものと疑い、部族要素を示す名とは決めかねた。しかし、唐会要、巻九七、吐蕃の項の冒頭に近く、「自二中国一出鄯城一五百里、過二鳥海一、入二吐谷渾部落、弥、多弥、蘇毗及白蘭等国一、至二吐蕃界一」とあり、これによれば、弥は現実に存在した Myi yul を云う

ものとすることが出来る。

(87) 「蘇毗」註127参照。ある部族が、他部族に母系を通じて同化し、吸収された場合、その部族名が姓の形で保存され、父系の氏族名の前に附き、複合部族名として残っているのが見られる。この事実は rLaṅs Po ti bse ru の一節 (f.52 b) に説明されている。例えば、lHa gzigs rLaṅs, sBraṅ rLaṅs (索朗郎)、Kho ḥPhan などがその例である。母系制社会をもつ部族の名が姓となつた場合、特に姓氏が併せて示されるようである。

(88) 旧唐書、巻一九七、新唐書、巻二二一上、東女国伝。「董」が女国王の氏として見える理由は、東女国を吸収した ḥPhan po の rLaṅs 氏が、董氏の一姓である Ṅa 氏を母系とした Ṅal bsod (Ṅan bso/*Ṅa ḥtsho) の系統だつたからである。

(89) DG.I, f.296 a.

(90) DG.I, f.292 b.

(91) 「蘇毗」一三三頁、同註111、114参照。「A rig の地には gTsaṅ sgar Don grub rab brtan gliṅ と Rva rgya bKra çis ḥbyuṅ gnas などがある。」(DG.I, f.29 b) Rva rgyas (AMR. pp.64–71. 註98参照)。gTsaṅ sgar (ibid. pp.57, 61) を西に控える Gad dmar, Ça bo (註100、101参照) に現代の A rig は住する (AMR. pp.56–59)。

(92) DG. I, f.273 a. Rock 氏はこの地方の地勢をくわしく報告している (AMR, pp.52–103, 107–119, 129–135)。

(93) 噶溪の噶は rKe の対音、溪は chu の訳語。噶竹河は対音をとつて写したもの。白河 (AMR, p.134) とも徳得坤都崙河 (AMR, p.109 参照) ともいわれる。黄河の南端部に南側から流入する河。唐哥または唐個と写される Thaṅ sgo (本文28頁と註161参照) の西側で黄河に入る。Rock 氏は dGaḥ chu と綴つて報告している (AMR, p.134)。

(94) 墨は dMe の対音、黒河 (AMR, p.134)、多爾大度坤都崙河 (多母達土昆多崙 AMR, p.109) とも示される。この河口は黄河の南端よりや、北上したところにあり、東側から流入する。Tsha sgaṅ pe çiṅ は Rock 氏の地図では Tsha ha we shing gom pa となつている。今日の地図(「中国」)に察漢津と示されているのは、この北の gTsaṅ sgar (AMP, p.61) と混同したものらしく、後者の位地に前者の名を不完全に記したものである。Tsha sgaṅ pe çin の寺名は dGaḥ ldan rab rgyas gliṅ (DG.I, f.285 a) である。

(95) Rock 氏の地図によれば、gÇi chu より北にあつて西側から黄河に注ぐ大河は、順に云うと、Tshab chu (AMR, pp.73, 117. A myes rMa chen spom ra の東峰から流

れ出る°)′ Chu sṅon (未尔們楚河′ AMR, pp.83, 116. A myes rMa chen の西側に水源をもち′ 鳥海′ Kara nor から出る水流も収めて黄河に入る° 隋書′ 巻三九′ 地理志′ 河源郡の原註にいう積石山河のことと°)′ Hoṅ chu (大河曜′ AMR. pp.83, 99, 102) となっている°

(96) rTse chu は北から流れ出て′ 西傾山北麓で南西行して黄河に入る (AMR, p.58. Cha çin chu 参照)°「中図」で巴河とあるのは′ この近くに拠った部族 dPal çul に由来する名であろうか°

(97) Rock 氏によれば′ 源の山地を rTse chu と共にし (AMR, pp.58, 82)′ Ba (ḥBaḥ) chu の名で示される° ḥBal chu は ḥBal mdo に注いでいる°

(98) Ra rgya は sToṅ sde (同德′ 東提) 地方にある寺院の名である° "Ra rgya bKra çis ḥbyuṅ gnas" (DG. I, f.29b),「Ra rgya dgon pa bKra çis kun bde gliṅ 或いは bÇad grub byams pa gliṅ ということが′ 後改めて′ dGaḥ ldan bkra çis ḥbyuṅ gnas ということ°」(DG. I, f.301 a) 註91参照

(99) Rock 氏の地図では′ 単に "Lha chhen" と示されている (sheet 4)°

(100) DG. I, f.294 a には Rin chen rgya mtsho なる人物について′「ḥBal gshuṅ に至り′ 後 Gad dmar の地を得……dBal maṅ 族と共に留ったので (この方面には) dBal maṅ, gNam mtsho, Sog ru, Khyu mchog, Yoṅ ça が′ また′ Gad dmar の低地には mGo tsha がいる°」と示す° また′ 同書の f.296 a には bKaḥ gdams glegs bam の中に授記された聖地として "rTse ḥbal gyi gshuṅ" の名を挙げている° なお′ gshuṅ は「中央」′「中心」の意である°

(101) AMR, p.59. には′ Gad dmar が Gan dmar と示される° 註100参照° DG. I, f.294 a には′「rTse chu の外側′ Ça bo のお住いの向い側に……」とあり′ 続いて「Ça bo ri rtse など……」とも挙げているのが見られる°

(102)「dpon Jo naṅ が′ 生涯の前半に ḥBal の Khe reb や lHa bkra などにいた時……」(DG. I, f.293 b) とある° Rock 氏はこの lHa bkra を "lhab bya" と示している (AMR, p.90)° また′ 我々の Khe reb を mKhas rabs naṅ, mKhas rab ñe ra (Khe rab) の綴りで示す (AMR, pp.93–95)° ḥBal gyi Khe reb は ḥBal chu 沿いの Khe reb の意であることはいうまでもない° 註97参照°

(103) mDzod dge ñin ṃa は′ DG. I, に「南部 rMa chu 上源 (河源) は大部分 mGo log, dBal çul, mDzod dge ñin srig, Sog po mdaḥ 十一部落′ A rig など (が住む) ……」(DG.I, f.29 b) と示されているから′ rMa chu 沿

いの mGo log, dBal çul, A rig の間に居住する mDzod dge ñin srig に属するものに違いない。mDzod dge gliṅ は rTse ḥbal に近い地にあり、mDzod dge の名を冠する地は、一般に、rMa chu 南端の東側にあるから、mDzod dge gliṅ も、二つの間、つまり、rTse ḥbal の南側に位置する筈である。したがつて、mDzod dge ñin ma と mDzod dge gliṅ とは、同一とまで云うことは出来ないが、同一地区にあることは確かである。

(104) Thu med Ho lo che rMa chuḥi lho mDzod dge gliṅ ḥdul na, yod paḥi thaḥi ji ḥgaḥ shig gis……ston mo phul/ sa cha bzaṅ ba daṅ ru sde maṅ po med tshul shus pas, ru sde daṅ bcas gshi btegs nas rTse ḥbal gyi sa bzuṅ/ (DG.I, f.289 b)

(105) 「顧チ支」七四三―四頁、と関係諸註参照。なお、smad kyi Ho lo che は青海の火落赤の意であり、Thu med Ho lo che を指す。その mDzod dge 地区進出については、松潘県志、巻三、辺防、嘉靖二九年の条の末尾に通志を引いて「獨火落赤留三伏捏工川ノ如ノ故……」とあり、mDzod dge は「租而結」と示されている。

(106) DG.I, f.282 a–b この文中の gLiṅ pa は、mDzod dge のものであるから、mDzod dge gliṅ pa であろう。土地は mDzod dge gliṅ と呼ばれた筈である。rTse ḥbal に近い gLiṅ pa を領したものの子が、rMa chu と rMe chu の合流する辺に土地をもつとすれば、rMe chu の北岸ということになろう。これは清朝史料を示す物蔵、Rock 氏の与える mDzod dge ḥbum tshaṅ (AMR, p.134) の地であり、土司は郎姓である。

(107) 四川通志、巻九六、武備、土司。松潘県志、巻四、土司。これらを見ると、郎氏は、松潘の西北から茂州の西部にかけて、土司の姓氏として最も多い。それは、郎氏一族が古くから勢力をたやさなかつたことを示している。下作爾革 mDzod dge smad ma が郎氏のものになつたのはいつからであるともわからないが、この地域が、rLaṅs 氏の歴史の初期からその勢力圏にあつたことは本文で後(32頁)に見るとおりである。

(108) dBal 氏は、ḥBal 氏のいたちようどそのあとに居住したため、おそらくこの ḥBal にあてようと試みる人も現れるかも知れないが、DG.I, ff.277 b–279 a によれば、dBal は lDoṅ 氏の一系であること、後代に南部から移住したことなどが知られているから、混同してはならない。その他、発音の上では両者の開きが大きく、誤つて表記される可能性も却つて少ないのである。

(109) rLaṅs Po ti bse ru のテキストは Rai Bhadur gDan sa pa 氏所蔵のもののマイクロフィルムによつた。テキス

トの誤脱はかなりのものであるが、他に見られないので致し方がない。その為、本文中に余分な手間を要したところもあつた。なお、このテキストをチベット敍事詩の Gesar との関係から R. A. Stein 氏はくわしく解説した (Une source ancienne pour l'histoire de l'épopée tibétaine, le Raṅs Po-ti bse-ru, Journal Asiatique, 1962. Paris.) が、チベット史の文献としては紹介されていない。

(110) ru mtsho については "pha spun rLaṅs kyi ru mtsho" (LPS, p.32 b) と他にも示されるが、くわしいことはまだ知られない。DzG, f.78 a. にいう Çar pa smad ma tsho (GT, p.190, n.702) と関係があるかも知ない。

(111) この rLaṅs 氏は本論で見るとおり、mDo smad に君臨したが、このほかに越嶲羌の麼麽 mDzod 夷として、同系でありながら、はるか南に居住する郎氏や、虚郎の地名が清朝史料で確認される。

(112) 註63参照。gLaṅ と rLaṅs の同一性については註64参照。

(113) LG, p.21.

(114) rLaṅs Po ti bse ru には、明らかに母系の伝承を記録した部分があり、そこには彼等の祖先の一枝が A boḥi Hor を形成したことを示している (LPS, pp.4a-b.) との点に関しは別稿でといた。註71参照。

(115) Sum pa に Hor の名を与えた珍らしい例は、HBC. f. 18b-19 a にあり、Sroṅ brtsan sgam po の選んだ五人の khos pon/khod pon (/mkhos dpon) の一人として示され、Sum paḥi khos dpon Hor bya shu rin po とある。

(116) Sum pa rLaṅs kyi Gyim çod, Gyim çan (/çod) Hor, Sum pa Hor とならべ、註114で知られることがらを併せ考えると、Sum pa の称が rLaṅs の代りに用いられていることを確認できる。しかし、敦煌文書は、rLaṅs 氏よりも ḥBal 氏が中央政界にむしろ有力な地位を保つたことを示している。即ち、Sum yul の rje は ḥBal 氏であり、(P.1286)、blon che になつたのは、ḥBal, rLaṅs のうちの ḥBal sKyes bzaṅ don tshab (DTH, p.102) であつて、Laṅ (/rLaṅs) Myes zigs ではなかつたからである。このことと、後代に於ける両氏の相対的地位の逆転との間には何らかの説明を加えることが必要になるであろう。ḥBal 氏は僅かにその名を地名に残すのみであるのに、rLaṅs 氏の名は非常に多くの土司の名のうちに認められるからである。

(117) 以下 rLaṅs Po ti bse ru よりの引用文は文末に所在葉序数を示す。

(118) LPS, p.22 b. de nas rTa çod çele phu gsum gyi

lha khaṅ gi phu na ḥBru bston (sic !) Dar ma si ti bshugs paḥi sar byon nas/

(119) LPS, p.29 b の rLaṅs grub thob gSer paḥi Dar (ma) bzaṅ (po) と rLaṅs kha che dge ḥdun bzaṅ po とは同一人だからである。

(120) 東女国伝には（新旧唐書）、この国を流れる河として「康延川」の名を与えている。今、本文でみるように、小金川の辺について rTa çod, Rim çod, luṅ dmar, rGyaṅ 等の名が与えられる。従つて、小金川河あるいはその支流に rGyaṅ chu の名が与えられてもさしつかえない。筆者は「康延」川をその対音と疑つている。

(121) 金川瑣記は小方壺斎輿地叢鈔第七帙に収められている。章谷屯志略の山川の条には、

惟境東北三十里墨爾多山脩極幽邃、山勢面二東南一、下如二覆鐘一、上如二螺髻一、……池東約十里許為二山之嶺一、平地数十弓、夷人畳レ石為二浮屠一、高数丈、瞻渇者咸擲二金銀珊瑚瑲珥於内一、囲繞作レ礼而去、由レ東百余歩、有二巨石一、矗立如レ筍、相伝為二釈迦成道処一

とあるが、雲母の岩や寺については示すところがない。四川通志、巻二一、輿地、山川の懋功直隷庁、章谷屯の条に

墨爾多山在二屯東六十里一、旧有二嚕嘛寺一

と寺のあるのが見られる。

白蘭と Sum pa の rLaṅs 氏　山口

(122) DzG, f.77 a では bTsan la は dGe shi rtsa の十八小王国の一つに数えられているが、所在は示されていない。DG.III, f.265 には、「Chu chen（促侵、或いは綏靖）の東側に bsTan pa, Rab brtan, bTsan lha などの王国がある。」と示し、同じく、f.266 b には、「Byes smad, bSod nams yag, Seṅ ge rdzoṅ（僧克宗）、Hā ñon の四が bTsan lha 四部である。」とある。この他、bTsan lha の Sum mdo の名がよく見られ（DG.III, ff.260a, 262 a, 266 b）、Sum mdo dgon があつたとも記るされる（DG. III, f.266 b）。小金川や儹拉は、地名であると同時に、そこにすむ部族を指してもいる。美諾は、元来部族名 Mi ñag の対音であつたのが、本文の引用では地名として用いられている。四川通志、巻六、輿地、沿革、懋功庁の条に「懋功屯即小金川美諾地」とあり、懋功屯が小金川、つまり儹拉の中心であつたことがわかる。

(123) 聖武記の乾隆初定金川土司記に

「其土司嘉勒巴内府…其庶孫莎羅奔…雍正元年奏授二金川安撫司一、莎羅奔自号二大金川一而以二旧土司澤旺為二小金川一……

とあり、金川のうち莎羅奔のよつた勒烏囲（勒歪）、噶爾厓（刮耳月、噶拉依）方面を大金川とし、澤旺の居た美諾官寨方面を小金川としたことがわかる。註124参照。

(124) 隋書、巻二九、地理志、汶山郡の条下に通化に、ついて「開皇初置曰二金川一仁寿初改レ名焉」とあり、元和郡県図志、巻三二、劍南道中、茂州管県、通化県の条に「隋開皇六年以レ近二白狗生羌一於二金川鎮一置二金川県一十八年改為二通化県一。」と示される。金川は「乾隆初定金川土司記」に「金川者小金沙江之上游也、一促浸(chu chen)水……」とあるように川の名である。金がとれるためその称を得たというが、ことの是非はともかく、「金」の川である。敦煌文書のチベット編年記(DTH, p.55)に"Kog yul gyi rGyaḥi Gyim po"として七四五年と七四七年とに見える Gyim po は、明らかに唐に加担した「金」の徒で、Kog yul は黒党項の「黒」(「蘇毗」註115、118参照)である。Gyim ɕod は「金」の谷、もしくは国を意味する。金川の川は t'śc̣i̯wän が古音とされるから ɕoṅ で写されてもよいように思われる。

(125) 章谷に対するチベット語の地名は知られていない。小金川に居住した sBraṅ 氏は、吐蕃王家の外戚 shaṅ po でもあつたため、単に Shaṅ po とも呼ばれた(DG.III, f. 258 b)。彼等は Kho ḥphan、つまり Kno/sGo を吸収した ḥPhan po の家に、母系として合流したから、Shaṅ (po) kho という呼び名があつてもよいわけである。我々は Shaṅ po sgo (DG.III, f.259 a) と示した例を知つているが、それを略した Shaṅ kho (/sGo) の対音が、章谷であるという決定的根拠を未だ見ていない。

(126) 金川瑣記には「然綏靖崇化章谷三屯江魚甚多」とあり、揃つて大金川河沿いにあることを示している。四川通志、巻二一、輿地、山川の懋功直隷庁の綏靖屯の条に「金川大河……過二綏靖屯一而西至二崇化屯一収二功噶山水一、歴二馬爾邦、巴底、巴旺一西南流至二章谷一会二小金川一」とあり、小方壺斎輿地叢鈔の蜀徼紀聞にも刮耳厓に至る道筋として、馬爾邦路由二章谷一経二巴旺一、巴底一至二刮耳厓一約五站」なる文を収めている。Ba bam, Bra sti は dGe shi rtsa rgyal khag 18 に含まれ(DzG, f.77 a)、清朝史料に頻出する。Bra sti はおそらく sBraṅ sde の訛りであろう。馬爾邦は、地図に見られる馬耳述と共に、本文で見た rTa ɕod luṅ dmar の dMar との関わりを示すものである。

(127) 東女国の王名は賓就 ḥPhan cheḥu であり、宰相は高覇 Kho pa であると新旧唐書は示している。ḥPhan cheḥu は ḥPhan po の rLaṅs が主であることを表し(cheḥu については「蘇毗」註62参照)、Kho pa は ḥPhan po rLaṅs に吸収された Kho ḥphan(註45参照)を云う。その一々は別稿にゆづるが、rLaṅs 氏の支配は明らかで、本文で扱つた Po ti bse ru の云うところとも一致する。

(128) 註54、55、56参照。

(129) 本文13頁参照。

(130) LPS, p.37 b

(131) この地名は不明のままである。

(132) mDo khams の ḥBri luṅ rne çod sTag ṅos mkhar (DNG, Ña, f.66 b), Khams lho brgyud phyug drug rMen ḥdo (PSJ, f.232 b) sNe çod sTag ṅos Sag khaṅ (LS, Za f.28 b) rMe çod (DGG, f.11 a), (LPS, p.53 b)

(133) Khams guṅ ru の dPal ḥbar と lCags ra の間 (LS, Za, f.28 b)「蘇毗」一五―一六頁と同註76参照。lCags ra と dPal ḥbar とは分けるべきである。

(134) 狭義の Khams (註80参照) を分けて

Khams stod Guṅ ru, Khams rked g-Yas ru, Khams smad g-Yon ru

とし (PSJ, f.217 a)、Khams stod の中心 (gshuṅ) を Chab mdo と見る。Nags çod も含み、rMe çod もうちに数える。Khams smad は Dar rtse mdo (打箭炉) を中心とし、dMar khams と云われる地域を指す (PSJ, f. 217 a, DzG, f.76 b)。その西にあり、Khams stod の南に当る (lho brgyud) dPo bo の地方 (DzG, f.75 b) をその西に控えるのが Khams rked と異称される g-Yas ru である。

(135) stod の rLaṅs とは勿論 Khams stod (註134参照) の rLaṅs である。Khams lho brgyud kyi phyug drug (PSJ, f.232 b) というのは、ḥBri klu mdo smad kyi phyug drug と、たとえ、主体を一にしていても、場所を異にしている。あるいは場所を変えたが、主体は同一であつたため、ḥBri klu の名を移住地にまで持ちこんだのかも知れない。本文に引用した原文は "Byaṅ chub ḥdre bkol yan/ rLaṅs kyi gduṅ brgyud ḥBri rluṅ mdo smad pa ḥdug/ Byaṅ chub ḥdre bkol mDo stod gnas drug tu phebs/ stod kyi rLaṅs lHa gzigs sde gsum gyi gduṅ brgyud ḥdi byuṅ ba sogs……(LPS, p.54 a)" とある。なお mDo stod, mDo smad については註79参照。

(136) LPS, pp.22 b ; 29 a「蘇毗」註90、97、98参照。

(137) 本文20頁参照。引用文(25頁)の一つに ḥPhan gtogs rLaṅs が多くいるとあることからも、その位置は本文のように、より南に推定されねばならない。

(138) DG.III, f.237 b.–f.245 b. rṄa ñin dMeḥi sar Khā çi ri khrod bKra çis dge ḥphel gliṅ (DG.III, f.245 b)

(139) 本文19、20頁参照。rMe chu の北岸では、mDzod dge ḥbum tshaṅ, mDzod dge gliṅ, mDzod dge ñin ma が、南岸では mDzod dge Byams me, mDzod dge smad ma があり、上流には mDzod dge stod ma があつた。rṄa pa (註88参照) は勿論、北岸の ñiṅ にもいたであろう。

(140) dMu dge から西北に向い、rṄa pa の拠点を北から

南くと敍べ、A ḥkhyams の前で「このあとは dMe（の地）を終つて……」(DG.III, f.248 b.) と示している。

(141) 麦桑は「中図」に見える名で、括弧の中に中阿壩と示されている。四川通志、巻九六、土司、松潘県志、巻四、土司の章には中阿壩墨倉としるされている。

(142) 「中図」にある墨窪は、四川通志や松潘県志に与えられる麦雜蛇湾に近い（四川通志、巻六、輿地、図考、松潘直隸庁地図）。

(143) 墨爾嫣は「中図」にのみ見える。

(144) 例えば、rMe chu も、DG.I, f.273 a では dMe chu であるが、ff.29 b, 281a, 282 b, 285 a などでは rMe としるされている。

(145) DG. I. ff.280 b–281 a.

(146) mDzod dge stod ma とは、rMe stod にいた mDzod dge の一族を云う。DzG, f.78 a は「A rig の東下手に mDzod dge stod ma（がある。）」と示し、mDzod dge smad ma を bSaṅ khog の南に置く (ibid. f.78 b)。前者に対し、Wylie 氏は、Rock 氏の mDzod dge stod ma dgon (=Rigs sgrol ma dgon. AMR, p.156) をあて、(GTDz, p.190, n.695)、後者には、Rock 氏のいう mDzod dge gar rñiṅ (GTDz, p.191, n.710) を指示する。然し、以上の所述はいづれも本文で扱う上作爾革の mDzod dge stod ma とも、先に見た（本文20頁）下作爾革 mDzod dge smad ma とも異つた位置にあるのに注意したい。

(147) 「中図」東経 103° より西にずれ、北緯 33°20′ 位に記録されているが、正しい位置ではありえない。

(148) 四川通志、巻六、輿地、図考、松潘庁 北図、西北図では、上作革として墨竹 (rMe chu) 河上流の東側に配してある。松潘県志の附図では二つの地を夫々上作格、下作格とし、前者を rMe chu 上流の南側に、下作格を支流西岸に置き、次に見る Byams me に近く示す。DG.I, f.29 b によれば、「mDzod dge stod に面し、sKa (rKa) chu と rMa chu が合流するあたりに Sog tsha (tshaṅ) rGyud stod grva tshaṅ がある。」ともある。更に、ibid f.283 b には「rMe chu は、rMe gdoṅ yag から西方に（向きを変えて）流れるが、その上手に Nags tshaṅ と Chos rjeḥi lha sde があり、東の Khog ka (克確) Riṅ から生ずる Re chu と、rGyu g-yaḥ の gSer teḥu で合流し、そこには sTag tsha (tshaṅ) ḥi sgar, mDzod dge stod ma, A skyid ḥbrog ru, mDo rtsa phu pa などがある。」と述べている。mDzod dge stod ma の位置が rMe chu 上流であることがわかり、これが gSer po に近く、Sog tshaṅ (AMR, p.72) の東側に面していることもわかる。

(149) Byams me の名を冠した Byams me ḥBras spuṅs

dgon は、註148で見た Sog tsha (tshaṅ) rgyud stod grva tshaṅ の近くにある (DG.I, f.29 b)。従って、Sog tshaṅ (AMR. p.72) と Byams me も互に近く、後者は rMe chu により近い北側 (註148参照) に配せられる。

(150) 註148で見た上作爾革 mDzod dge stod ma の位置を、Sog tsha (ṅ) (註148参照) を仲介にして、本文及び註149で見た mDzod dge byams me の位置と合せて見ると、二つの関係位置が明瞭になる。

(151) Thaṅ sgor は「中図」で唐哥、松潘県志附図では唐個と示されている。

(152) LPS, pp.12a, 14 b.

(153) 東女国 rGyal mo roṅ の sBraṅ 姓は Suvarṇa のチベット訛りであり、チベット語では gSer po といい、「金」の対音から Gyim po とも云う。註1、71、126参照。

(154) GT, p.191, n.715 これによれば、三つの The bo があり、bLa-braṅ の北に一つ、南に二つあると示されている。The bo は松潘県志附図に鉄布とあり、関連して The bo roṅ, (DG.III, f.215 b) The bo bum pa (DG.I. f.283 a) の名も見出される。前者は DG.III で見るように、mDzod dge に東接し、後者は、恐らく、mDzod dge ḥbum tshaṅ とのつながりを示す名であろう。四川通志、巻三十、輿地、関隘の松潘直隷庁の条下に「潘州営在二庁北四百八十余里一、即潘州故址、東北通二甘粛之洮河二州一、有二竹利鉄布鹿哨甘家等番一」とある。潘州故址は、本文に見るように、下潘州の地であり、gSer po の地でもある。鉄布がその東北にあることは右の文で明らかになる。

(155) 四川通志、巻九〇 武備、辺防、景泰三年の条。(明史、巻三一一、松潘衛から引用)

(156) 松潘県志 巻一収載 天下郡国利病書 巻六七、四川三、蜀中辺防記。本文29頁参照。

(157) ADC, no.1172 漳、no.550 臙。no.697 堡。但し、虹橋のすぐ北にある漳臙屯とは全く別であることに注意。註169参照。

(158) 四川通志、巻三十、輿地、関隘、松潘庁の条。漳臙堡、古潘州と松潘との距離は、本文に見るように、「庁西北四十里」、「衛北七百五十里」、「距二黄勝関一一百二十里」の他に、四川通志、巻三十に「潘州営在庁北四百八十余里」などとある。四百、七百の四、七は西の誤写かと思われる。また、西北四十里は百を脱したのであろう。このようにすれば、黄勝関からの距離とも調和すると思われる。

(159) 「後徒而南」がそれである。註47参照。

(160) 四川通志、巻五七、輿地、古蹟、松潘の条。

(161) 四川通志、巻九六、土司、松潘県志、巻四、土司中に阿細柘弄としてその関係位置が与えられている。恐らく、

チベットでいうEn ḥdzi khog であろう(DG.III, f.221b)。松潘県志の附図では、巴細（dPal çes 註167参照）と班佑の間に示されて、上潘州たるにふさわしいところを与えられている。

(162) Zuṅ phan DzG, f.78 a. Zuṅ ḥphan DG.III, ff.241 a, 263 a. DG. I. f.32 a.

(163) 四川通志、巻三〇、輿地、関隘、松潘の条。

(164) DG.III, f.233b.「Co ne の dpon（酋長）の治下にある Has bshi span で、僧院長と酋長とが連帯して発起人となり、十四番目の rab byuṅ のかねのと亥（十二番の誤りならば、雍正九年）に、四軍地域（dmag ru bshi）の寺院と草庵三十箇寺以上をまとめて、rGya gar thaṅ に dGaḥ ldan dar rgyas gliṅ を建て、四百以上の学僧が集つた。」とある。官兵駐防の場所の達建寺であろうか。「大建寺」の方は松潘県志附図の上包坐に近く見出される。

(165) 本文31頁に見る「黄勝在二漳臘西南十里一」の方は、狭義にとらないと説明できない。

(166) 四川通志、巻九六、武備、土司、松潘庁、漳臘営属。

(167) 四川通志、巻九六、武備、土司、松潘庁、漳臘営属に、班佑に続いて示される。「其地東至二九十里一交二上包坐余湾寨界一、南至二一百里一交二上作革寨界一、西至二八十里一交二阿細寨界…」とあるから、巴細蛇住は班佑と上作革の間を北上したところにあり、上潘州の阿細の東側に当る。DG.III, f.220 a には「The bo の山手の地の dPal çes steṅ kha には、四大僧院中の一つであり、dPal çes Rab ḥbar の住持した dPal çes naṅ goṅ ḥog がある。」として Tshoṅ ru stod（上崇路）、gZaḥ ruḥi stod（作路の山手）に続いて示される。Brag çul の名はこれらに先だつて、庵名として別に示される（DG.III, f.216 a）が、その庵の建立者が Brag çul の出身だつたためであり、dPal çes と別にあるわけではない。

(168) 天下郡国利病書、巻六七、四川三、蜀中辺防記、川西の漳臘の条下にある。

(169) 天下郡国利病書、巻六七。註168に示す箇所に続いて示される。紅橋については、同書にも「志云松州北二十里有二落紅橋一長二十丈、餉道所二必経一也。虹橋下七里為二潭家屯一……又虹橋下八里為二高屯子一……」とある。漳臘屯の南七里にあることも同じところに示されている。漳臘屯は漳臘堡とは全く別であることに注意したい。

(170) DG.III, f.227 b.

(171) 色既塘は、「中図」で岷江源と墨渓河上流の間に位置を与えられている。

(172) DG.I, f.273 b. ここで「Zi koḥu mkhar（西固）と Ke juḥi mkhar（階州）を経て」とある一句は gSer thaṅ

gi chu と gSer chu を混同して gSer chu の通過点を挿入したものである。

(173) DG.III, f.234 b.

(174) DG.III, f.228 b.

(175) Has shi span については、その位置を知らない。ḥBru chu は岷州の南から gSer chu（白水江、「中図」の白竜江）にそそぐ岷江（但し、「中図」の）であろう。

(176) これは洮河原の一つである包座河（註28参照）ではない。

(177) 松潘県志、巻一、山川には「源出二県北上包座番地一、即白竜江亦名二白水江一　北源東北流入二甘粛界一折東南流歴二階州文県一東北合二南流一入二嘉陵江一」最初の北源が本文に云うḥBru chu 註176で見た岷江である。

(178) gçoṅ/gçoṅs は spaṅ gçoṅs、山合いの草原をいい。引用文の内容に相応する名詞である。

(179) 岷江西流も潘州河と呼ばれ、噶喇山（「中図」の噶利坪）と班佑方面から流出している。つまり、gSer po から東流する河だけでも三つが数えられるわけである。註154に引用した四川通志の文には、続いて次のように示される。

西通二帰徳、西寧一有二合壩（独雑 sTag tshaṅ lha mo）上下作革（mDzod dge stod, smad）潘下（?）等及挿漢丹津（白津? Tsha sgaṅ pe çin）部落一　西南有二阿壩一（rÑa pa）即郭雑克（mGo log）毛児革（dMu dge）等揮夷雑二處其間一

帰徳、西寧は北に位し、合壩は北西に当る。毛児革は阿革に近く南にあり、西南は rMe yul に相当する。本文（30頁）引用の班佑寨土の位置表で、南北に長いことの大略の見当がつくであろう。

(180) ḥPhan gtogs rLaṅs (LPS, p.52 a) ḥPhan gtogs A dar (ḥPhan la gras mtshan. ḥPhan に内属する LPS, p.53 a), ḥPhan gog gtogs rLaṅs (LPS, p.53 b)、最後の例に見られる Gog は gSer po の sBraṅ 氏の故地 Gog/gSer Gog (Ru thog の北西) に起源をもつ名かも知れない。

(181) 小金川方面の sBraṅ は、唐代に既に東女国として ḥPhan cheḥn（賓就）のもとにあり、本文22頁で見た Ru dpon は、gSer pa と同系で、mDo smad g-Yar mo thaṅ に君臨した rTse ḥthon che の子孫であるが、Gyim çod 金川を支配した。Ru dpon, gSer pa の第二代には dPal gyi seṅ ge とか、Su ga ta go cha という仏教徒としての名が始めて現れるので、初代は八世紀末頃の筈である (LPS, p.12 a 参照)。So maṅ の女国の歴史が DG.III. にいくつか見られるが、時代は明瞭でない。ただ女王の夫に rÑa pa（但し、rLaṅs の一姓）の名が見られ、清朝史

料は中郭羅克 mGo log bar ma の土司名に索朗(sBraṅ)の名を与えている。いづれも gSer po に近い地域だけに注目される。

(182) LPS, pp.10 b–14 b.

(183) 「蘇毗」註62参照。

(184) 明史、巻三二一、松潘衛、四川通志等に雜羅支とあるのは誤りである。

(185) ḥPhan の称は、明らかに吐蕃時代の名をもつ人に冠して用いられている。ḥPhan rag sba zo, ḥPhan dgoṅs mo zla, ḥPhan gzigs ru tshab (LPS, p.11 a) ḥPhan lha khra mgo (LPS, p.12 a) これらは吐蕃風の名であり、服属以後であるが、仏教導入以前の名でもある。元来の彼等の名は、より単純な形で示されており、吐蕃王朝崩壊後は元来の名のように単純になる。また、その祖として示される ḥPhan po che rLaṅs の名は「潘州王の rLaṅs」という意味で、一つの異名とすべきであろう。

(186) 宋史、列伝、巻二五一、外国八、吐蕃、「西凉府六谷都首領潘羅支」として示す。

(187) LPS, p.22 b には、rLaṅs 氏の人物として、ḥPhan yul ba Dar ma dbaṅ phyug を挙げているが、おそらくこの hPhan yul を指すのであろう。他の ḥPhan yul (「蘇毗」註102、116、117) をとれば、人名に冠する地名として広すぎるからである。

(188) gSer po に属する西側の rMe の地が rÑa pa と境を接し、或いは重なつていた(本文27頁参照)。実は、この rÑa pa は古 rGyal mo roṅ の女王の夫の姓として見え (DG.III, f.260 a)、ḥPhan po che rLaṅs に属し、東女国伝に女王国の氏として見える賓就(註88参照)と多分同一であろう。rÑa pa は、早くから rLaṅs 氏の母系となつていた (LPS, p.10 b)。

(189) LPS, p.47 a、理番庁志、巻一、輿地、里居に「九子(俗謂九子分為=九砦-故名)竜窩(中有=竜池-故名)孟董九砦……」とあるもの。註190参照。

(190) 理番庁志、巻一、輿地、山川に雪山として「一統志云在=威州西南一百里-山有=九峯-」とあるが、遠過ぎる。四山通志、巻二一、輿地、山川、雜谷庁条下に、「筆架山在=庁西四里-隔レ江、〔一統志〕一名=九子竜窩-、或謂=之玉山-」とあるのと同じかと疑いたくなるが、これはむしろ註189の kLu sgaṅ riṅ mo に相当するものである。とすれば、同書に「大溪〔一統志〕在=庁城西-、源発=俊磨土司東界-、大雪山西南流」とあるものが最もふさわしい。大溪は Chu chen 大金川河の上流俊磨河 So maṅ chu で、俊磨の東界から流れ出し、大雪山はその東北で雜谷庁の西に聳えるわけである。

(191) 「蔡毗」註15のように筆者は混乱した記述を示したので、訂正したい。文成公主が滞在した Tsha ba roṅ は Tsha çod で、sgaṅ gsum の Tsha ba sgaṅ (DzG, f. 75 a) に当り、sPo bo の東(南)にある。(GT, pp.178–179, n.584) もう一つの Tsha ba roṅ は mDo smad の rGyal mo tsha ba roṅ である。元来、mGar thar の東の、金川にあった東女国を指して、rGyal mo roṅ と称していたが、これが北上して Tsha ba roṅ (Tsha kho 雜谷) の西に移ったため、この方を rGyal mo Tsha ba roṅ と称するに至った。「女王の Tsha ba roṅ の意である。Gya roṅ は右の略称であり、Vairocana の赴いたのは、Gya roṅ の方の Tsha ba roṅ である。Tsha çod の Tsha ba roṅ には、rGya mo であり、rGyal mo である文成公主は至ったが、rGya mo も、rGyal mo も附しては呼ばないようである。

(192) 四川通志、巻九六、武備、土司、「猓猓種」と示す。松潘県志、巻四、土司、「猓猓種類」と示す。

(193) DG.III, f.259 a. LPS, pp.5 a, 13 b, 52 b.

(194) 旧唐書の東女国伝では、高羆 Kho pa は賓就 ḥPhan cheḥu の宰相のようなものとなつていて、明らかに ḥPhan po の rLaṅs 氏に臣属していたことを示している。この意味で、白狗は白蘭に同化して「白」を崇ぶに至つた Kho ではないかと疑われる。白狗は鄧氏であり、lDoṅ は ḥPhan po che rLaṅs と婚姻していたことが確かめられる (LPS. p.10 b) から、唐代に同化乃至従属関係が成立していたとすることが出来る。

(195) 四川通志、巻九六、武備、土司、「素朗」、松潘県志、巻四、土司、「素朗」LPS, p.8 a には、先祖の母とそのトーテムの訪れる場所として、sBraṅ 氏のいた gSer mo ljoṅs を挙げ、Ara, dGra の形で母系祖先 sBraṅ に言及する (LPS, pp.4 b, 5 a, 52 b) ほか、DG.III. には、sBra (ff.259 a. 260 a), sBraṅ (f. 259 b) の形で rGyal mo roṅ So maṅ 王家の姓のことが述べられる。

(196) Sum yul の中心は rLaṅs の拠つていたところで ḥBal の地はむしろ、その端ということになる。luṅ sum, khra sum, ya sum の使い方は敦煌文書 P.1285, 1286, 1290, 1039, 1060, AFL. 等に見られ、いづれも、支配者の所在地名の末尾に附して用いられている。

(197) 註88参照、TAMS, pp.44–45. 参照。